

かわ よけ い せき しも こおり やま い せき  
川除遺跡・下郡山遺跡

出水酒造株式会社出水工場建設に伴う川除遺跡・下郡山遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2013年3月

出水市教育委員会



かわ よけ い せき しも こおり やま い せき  
川除遺跡・下郡山遺跡

出水酒造株式会社出水工場建設に伴う川除遺跡・下郡山遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2013年3月

出水市教育委員会



## 序 文

本書は、鹿児島県出水市教育委員会が出水酒造株式会社出水工場建設に伴い、平成24年度に発掘調査を実施した川除遺跡及び下郡山遺跡の発掘調査報告書です。

確認発掘調査は、出水市教育委員会が調査主体となって実施しましたが緊急発掘調査及び報告書作成は、事業主である出水酒造株式会社から委託を受けた大福コンサルタント株式会社が、出水市教育委員会の指導・監督、総括のもとに企画・担当して行いました。

川除遺跡では、縄文時代の生活の跡や、遺跡の周辺にある中世山城跡や古代官衙に関連すると思われる土師器や須恵器などが出土しています。

下郡山遺跡は、古墳時代の地下式板石積石室で著名な溝下古墳群に隣接しています。発掘調査では古墳時代の住居跡が検出され、溝下古墳群との関係性を思わせるような成果を得ることができました。

これらの成果は、地域の歴史を知る上で、貴重な資料になるものと考えられます。

この報告書が文化財の保護並びに学術研究、郷土史研究のために広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、本調査に際して多大な御理解と御協力をいただきました地元住民の方々をはじめ、本報告書を作成するにあたって、御指導をいただきました諸先生ならびに関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成25年3月

出水市教育委員会

教育長 溝 口 省 三

## 例　言

- 1 本報告書は、出水酒造株式会社出水工場建設に伴う川除遺跡・下郡山遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び報告書作成は出水酒造株式会社の委託のもと出水市教育委員会が指導・監督、大福コンサルタント株式会社が実施した。
- 3 発掘調査における実測作業は重留康宏・小鹿伸輔（大福コンサルタント株式会社）、遺物実測は重留・小泉信吾（大福コンサルタント株式会社）が行った。
- 4 発掘調査・報告書掲載遺物写真撮影は重留が行った。
- 5 整理作業は大福コンサルタント株式会社整理作業事務所において行い、洗浄・注記・接合・トレーは整理作業員の協力を得た。
- 6 土層断面及び土器の色調については『新版標準土色帖』に拠った。
- 7 本文執筆は岩崎新輔（出水市教育委員会）、重留・小泉、編集は重留が行った。
- 8 本報告書のレベルはすべて海拔高である。
- 9 本書に記載した遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真図版に記した番号と一致する。
- 10 発掘調査で得た全ての成果については、出水市教育委員会で保管し活用する。

## 凡 例

1 遺構の略号は以下の通りとする

礫集積 S I 竪穴状遺構 S H

2 挿図の縮尺は以下のとおりである

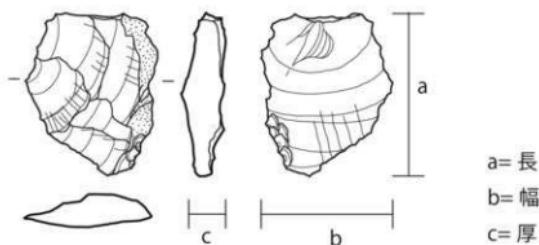
遺構 磯集積 30 分の 1 竪穴状遺構 60 分の 1

遺物 純文土器 3 分の 2

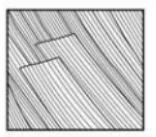
土師器 4 分の 1

剥片石器 3 分の 2 磯石器 3 分の 1

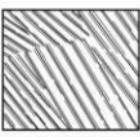
3 石器計測表および觀察表の計測値は、下記の計測方法に拠る



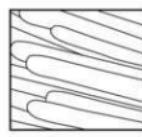
4 土器実測における調整は、以下の通りである



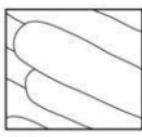
ハケ



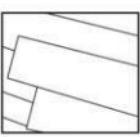
タタキ



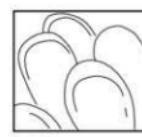
ミガキ



ナデ



ヘラナデ



指オサエ

## 本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 確認調査（平成23年度）	2
第3節 本調査及び報告書作成（平成24年度）	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 基本層序	6
第3章 川除遺跡	11
第1節 調査の方法	11
第2節 調査の概要	11
第3節 繩文時代の調査	12
第4節 弥生時代以降の調査	21
第5節 小結	26
第4章 下郡山遺跡	31
第1節 調査の方法	31
第2節 調査の概要	31
第3節 繩文時代の調査	32
第4節 弥生時代～古墳時代の調査	35
第5節 小結	66
第5章 総括	67
図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 川除遺跡・下郡山遺跡確認調査トレンチ配置図	2
第2図 川除遺跡・下郡山遺跡の位置	5
第3図 基本層序模式図	6
第4図 川除遺跡・下郡山遺跡と周辺の遺跡	7
第5図 川除遺跡遺構分布図	13・14
第6図 川除遺跡縛集積(1)	15
第7図 川除遺跡縛集積(2)	16
第8図 川除遺跡縛集積(3)	17
第9図 縄文土器実測図	18
第10図 石器実測図(1)	19
第11図 石器実測図(2)	20
第12図 弥生時代～中世遺物実測図	22
第13図 中世の遺物実測図	23
第14図 縄文土器実測図	33
第15図 石器実測図	34
第16図 下郡山遺跡遺構分布図	37・38
第17図 1号竪穴状遺構実測図	39
第18図 2号竪穴状遺構実測図	40
第19図 2号竪穴状遺構出土土器実測図	41
第20図 2号竪穴状遺構出土土器・石器実測図	42
第21図 3号竪穴状遺構実測図	44
第22図 3号竪穴状遺構出土土器実測図(1)	45
第23図 3号竪穴状遺構出土土器実測図(2)	46
第24図 4号竪穴状遺構実測図	48
第25図 4号竪穴状遺構石圓切実測図	49
第26図 4号竪穴状遺構出土土器実測図(1)	50
第27図 4号竪穴状遺構出土土器実測図(2)	51
第28図 4号竪穴状遺構出土土器実測図(3)	52
第29図 4号竪穴状遺構出土土器・石器実測図	53
第30図 5号竪穴状遺構実測図	54
第31図 6号竪穴状遺構実測図	55
第32図 6号竪穴状遺構出土土器実測図(1)	56
第33図 6号竪穴状遺構出土土器実測図(2)	57
第34図 7号竪穴状遺構実測図	57
第35図 8号竪穴状遺構実測図	58
第36図 8号竪穴状遺構出土土器実測図	59
第37図 弥生時代～古墳時代土器実測図	60
第38図 古墳時代～中世の遺物実測図	61

## 表目次

表1 川除遺跡・下郡山遺跡と周辺遺跡一覧表	8
表2 川除遺跡土器観察表	24
表3 川除遺跡石器・石製品観察表	25
表4 下郡山遺跡土器観察表(1)	62
表5 下郡山遺跡土器観察表(2)	63

表6 下郡山遺跡土器觀察表（3）	64
表7 下郡山遺跡土器觀察表（4）	65
表8 下郡山遺跡石器觀察表	65

## 図版目次

図版1	71
川除遺跡礫集積検出状況（西から） 川除遺跡礫集積検出状況（西から）	
図版2	72
下郡山遺跡SH3 完掘状況（南西から） 下郡山遺跡SH3 調査状況（南西から）	
図版3	73
下郡山遺跡SH3 土器出土状況（1）（東から） 下郡山遺跡SH3 土器出土状況（2）（南から）	
図版4	74
下郡山遺跡SH4 石圓炉検出状況（北西から） 下郡山遺跡SH4 石圓炉（南東から）	
図版5	75
SI4 検出状況 SI5 検出状況 SI6 検出状況 SI7 検出状況 SI8 検出状況	
SI9 検出状況 長頸壺出土状況 SI14 検出状況	
図版6	76
SI11 検出状況 SI12 検出状況 SI17 検出状況 段丘礫 段丘礫 須恵器出土状況 発掘調査状況	
図版7	77
川除遺跡包含層出土遺物（縄文土器） 川除遺跡包含層出土石器 川除遺跡包含層出土遺物（礫石器）	
川除遺跡包含層出土遺物（弥生土器・土師器） 川除遺跡包含層出土遺物（弥生土器）	
川除遺跡包含層出土遺物（皿・環） 川除遺跡包含層出土遺物（管状土錐・土製品） 川除遺跡包含層出土遺物（石錐）	
図版8	78
SH1 検出状況（南西から） SH1 完掘状況（北から） SH2 調査状況（西から） SH2 完掘状況（北東から）	
SH2 出土遺物（1） SH2 出土遺物（2） SH1・SH3 完掘状況（北東から）	
SH3 検出状況（北西から）	
図版9	79
SH3 完掘状況（北西から） SH3 土器出土状況（東から） SH3 土器出土状況（南から）	
SH3 地床炉 <sup>1</sup> ・土器出土状況（南東から） SH3 地床炉半裁状況（北から） SH3 出土遺物（1）	
SH3 出土遺物（2） SH4 検出状況（東から）	
図版10	80
SH4 調査状況（1）（南西から） SH4 調査状況（2）（北東から） SH4 石圓炉検出状況（北西から）	
SH4 石圓炉遠景（南東から） SH4 石圓炉近景（南東から） SH4 石圓炉近景（北から）	
SH4 石圓炉遺物出土状況（南東から） SH4 石圓炉調査状況（南西から）	
図版11	81
SH4 出土遺物（甕） SH4 出土遺物（甕底部） SH4 出土遺物（壺） SH4 出土遺物（高环）	
SH4 出土遺物（壺・小型丸底甕） SH4 出土遺物（石器） SH6 完掘状況（南から） SH6 検出状況（北東から）	
図版12	82
SH6 調査状況（北東から） SH6 遺物出土状況（北東から） SH6 出土遺物（1）	
SH6 出土遺物（2） SH8 検出作業状況（南から） SH8 調査状況（北東から）	
SH8 完掘状況（北東から） SH8 出土遺物	
図版13	83
下郡山遺跡包含層出土遺物（1） 下郡山遺跡包含層出土遺物（2） 下郡山遺跡包含層出土遺物（3）	
下郡山遺跡包含層出土遺物（4） 下郡山遺跡包含層出土遺物（5） 下郡山遺跡包含層出土遺物（6）	
図版14	84
発掘体験実施状況（1） 発掘体験実施状況（2） 発掘体験実施状況（3）	
現地説明会実施状況（1） 現地説明会実施状況（2） 現地説明会実施状況（3）	

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経緯

平成23年4月に出水酒造株式会社（以下出水酒造）は、出水市役所において、焼酎工場を建設することの説明会を行った。

出水酒造は事業計画実施に先立ち、工場建設地内に埋蔵文化財の有無について、出水市教育委員会に照会した。

当該地は、周知の遺跡「川除遺跡」と「下郡山遺跡」が所在することが確認されたため、出水市教育委員会は平成24年2月6日から同年3月7日にかけて確認調査を実施した。

調査の結果、事業区内の川除遺跡2,300m<sup>2</sup>、下郡山遺跡2,000m<sup>2</sup>の範囲に遺跡が残存していることが確認された。

これを受け、出水市教育委員会は遺跡の取扱いについて、平成24年4月11日に県教育庁文化財課と出水酒造の三者で協議を行った。

出水酒造の工場建設意向も踏まえて、発掘調査は出水市教育委員会の指導、監督の下、出水酒造の委託事業として、大福コンサルタント株式会社（以下、大福コンサルタント）が発掘調査を行うこととなった。

これにより、出水酒造、出水市教育委員会、大福コンサルタントの三者は「出水酒造株式会社出水工場建設に伴う川除遺跡・下郡山遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査に係る協定書」を同年5月18日に締結し、同年7月2日から9月28日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 確認調査（平成23年度）

### 1. 調査の組織

事業主体	出水酒造株式会社	代表取締役	東 孝昭
調査主体	出水市教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	溝口 省三
調査企画者	〃	教 育 部 長	植村 猛
〃	〃	生涯学習課	課 長 園畠 正治
〃	〃	〃	文 化 係 長 吉永 恵子
事務・調査担当	〃	主 査	岩崎 新輔
〃	〃	主 査	橋元 邦和

### 2. 調査の概要

川除遺跡・下郡山遺跡の確認調査は平成24年2月6日から同年3月7日にかけて実施された。

工場敷地の中でも建造物建設予定地内を中心に約10m間隔で2m×4mのトレンチを設定し、101、102、201～213トレンチは機械掘削で、その他のトレンチの掘下げは人力で行っている。

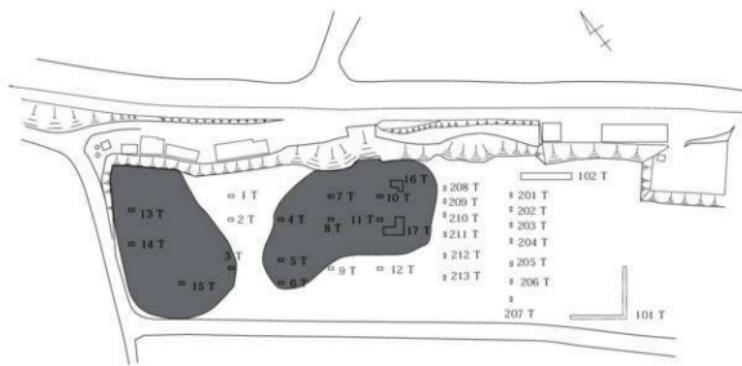
川除遺跡側に設定したトレンチからは包含層中から縄文時代早期の押型文土器や土師器、陶磁器類、石器が出土した。これらの遺物は、平板測量もしくはトレンチ毎に一括して取上げている。遺物の出土に合わせて礫の集積も検出された。

下郡山遺跡に設定したトレンチに関するも古墳時代の土師器に代表される遺物が出土するとともに、竪穴住居跡のコーナー部と推測される箇所が検出された。

溝下古墳群の対面側については 20 m × 2 m の L 字形 101 トレンチと 20 m × 2 m の 102 トレンチを設定し遺構の検出に努めたが、攪乱著しく良好な成果は得られなかった。

以上の結果を踏まえ、遺物・遺構が確認されなかつた地点と、耕作で著しく攪乱され土層堆積状態が不良な地点を除いた第1図着色部を川除遺跡と下郡山遺跡の調査範囲とした。

なお、確認調査時出土の遺物については、本調査時出土遺物と合わせて報告する。



第1図 川除遺跡・下郡山遺跡確認調査トレンチ配置図

### 第3節 本調査及び報告書作成（平成24年度）

#### 1. 調査の組織

事業主体 出水酒造株式会社 代表取締役 東 孝昭

調査主体 出水市教育委員会

調査責任者 " 教育長 溝口 省三

調査企画者 " 教育部長 植村 猛

" " 生涯学習課 課長 園畠 正治

" " " 主幹兼文化係長 内之浦 昭

事務・調査担当 " " 主査 岩崎 新輔

" " " 主査 橋元 邦和

調査実施者 大福コンサルタント株式会社

調査責任者 " 代表取締役 福田 光一

照査 " 別府 次郎

調査担当 " 主任技術者 重留 康宏

	調査員	井之上 宏
"	"	小泉 信吾
"	"	小鹿 伸輔
事務担当	"	川野 千尋

## 2. 調査の概要

本調査は平成 24 年 7 月 2 日（月）から同年 9 月 28 日（金）の日程で実施した。川除遺跡の調査においては縄文時代早期～中世の遺物が同一層内から混在して出土する様相の中、礫集積が検出された。

近接する下郡山遺跡においては縄文時代早期から中世にかけての遺物が出土するとともに、竪穴状遺構が検出された。

現地における整理作業は平成 24 年 9 月 10 日（月）から平成 25 年 3 月 29 日（金）までの日程で実施した。この期間は出土遺物の洗浄・注記作業を実施している。現地における整理作業は、工場建設予定地内で実施していたことから、継続作業は工場建設工事のため困難となり代替地にて整理作業を実施することとなった。工事施工者の大林組株式会社九州支店の協力により、工事事務所敷地内に整理作業事務所を設置することが可能となった。平成 24 年 11 月 28 日（水）から 30 日（金）にかけて整理作業事務所の設置を行い、同年 12 月 3 日（月）から 28 日（金）で洗浄・注記作業を終了し、翌平成 25 年 1 月 7 日（月）から同年 3 月 29 日（金）にかけて接合、復元、実測、拓本、トレース、遺物写真撮影、本文作成、編集、収蔵整理を実施した。

## 3. 日誌抄

- 7月 2 日（月）～4 日（水）除草作業、安全対策（侵入者防止措置）
- 7月 5 日（木）川除遺跡表土除去作業開始
- 7月 7 日（土）仮設物設置
- 7月 11 日（水）発掘作業員による作業開始、仮設水道工事終了
- 7月 13 日（金）調査区南側遺構検出
- 7月 17 日（火）調査区北西部・南部・北部にサブトレーンチ設定。同掘下げ
- 7月 18 日（水）調査区北部より礫群多数検出。グリッド設置
- 7月 19 日（木）調査区北部包含層掘削。古墳時代～中世の遺物が混在して出土
- 7月 20 日（金）天候不順で作業と待機を繰り返す中、遺構検出作業
- 7月 21 日（土）～22 日（日）除草作業。発掘体験準備
- 7月 23 日（月）調査区北部包含層掘削
- 7月 24 日（火）発掘体験実施。児童 22 名が参加
- 7月 25 日（水）調査区北部包含層掘削。この時点で礫集積 12 基検出
- 7月 26 日（木）～27 日（金）調査区北部・東部包含層掘削
- 7月 28 日（土）～29 日（日）川除遺跡礫集積実測
- 7月 30 日（月）～31 日（火）川除遺跡、調査区東側遺構検出。礫集積等の検出なし
- 8月 1 日（水）台風接近のため耐風養生
- 8月 2 日（木）～8月 9 日（木）調査区中央部包含層掘削、礫集積実測
- 8月 3 日（金）下郡山遺跡立木伐採
- 8月 6 日（月）下郡山遺跡調査範囲縄張り

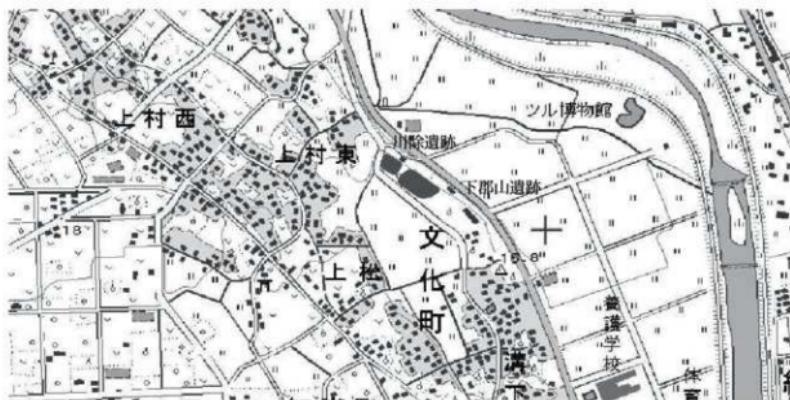
- 8月8日（水）下郡山遺跡において表土除去作業開始  
川除遺跡、中央部包含層掘削
- 8月9日（木）下郡山遺跡、遺構検出
- 8月10日（金）下郡山遺跡、遺構検出。竪穴状遺構2基検出
- 8月13日（月）～15日（水）底土処理。縄集積実測
- 8月16日（木）川除遺跡、縄集積精査
- 8月17日（金）川除遺跡調査区東側遺構検出
- 8月18日（土）～19日（日）川除遺跡縄集積実測
- 8月20日（月）下郡山遺跡、遺構検出。竪穴状遺構2基検出
- 8月21日（火）川除遺跡遺構写真撮影  
下郡山遺跡、遺構検出。調査区西部にて遺構の検出なし。
- 8月22日（水）下郡山遺跡、遺構検出。縄文時代包含層掘削
- 8月24日（金）下郡山遺跡、遺構検出。竪穴状遺構4基検出
- 8月27日（月）台風接近のため耐風養生
- 8月28日（火）台風の影響により作業員は休業。遺跡見学会準備開始
- 8月29日（水）下郡山遺跡、竪穴状遺構調査開始
- 9月1日（土）除草作業
- 9月3日（月）～7日（金）下郡山遺跡、竪穴状遺構調査
- 9月8日（土）～9日（日）縄集積実測。遺跡見学会資料作成
- 9月10日（月）～11日（火）川除遺跡、旧石器時代包含層確認のため地山まで掘下げ  
下郡山遺跡、竪穴状遺構調査。同実測  
下郡山遺跡縄文時代包含層調査  
整理作業（土器洗浄）開始
- 9月12日（水）～13日（木）下郡山遺跡竪穴状遺構調査。同実測。遺跡見学会準備
- 9月14日（金）川除遺跡 旧石器時代包含層確認のため地山まで掘下げ  
下郡山遺跡縄文時代包含層調査
- 9月15日（土）遺跡見学会。見学者152名
- 9月18日（火）台風の影響で調査区に滯水のため作業員は休業。滯水を除去し、竪穴状遺構の実測作業を行う
- 9月19日（水）下郡山遺跡、竪穴状遺構調査
- 9月20日（木）川除遺跡、旧石器時代包含層確認のため地山まで掘下げ  
下郡山遺跡、竪穴状遺構調査  
下郡山遺跡縄文時代包含層調査
- 9月21日（金）出水市議会議員視察。出水市教育委員会が対応
- 9月22日（土）～23日（日）下郡山遺跡4号竪穴状遺構調査
- 9月24日（月）下郡山遺跡1号・5号・8号竪穴状遺構調査終了
- 9月25日（火）下郡山遺跡2号・3号竪穴状遺構終了
- 9月26日（水）下郡山遺跡6号・7号竪穴状遺構調査終了
- 9月27日（木）4号竪穴状遺構調査終了。下郡山遺跡検出の竪穴状遺構調査終了
- 9月28日（金）発掘調査終了。3者にて発掘調査終了を現地確認

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

### 第1節 地理的環境

川除遺跡・下郡山遺跡は鹿児島県出水市文化町に位置する。

遺跡の所在する出水市は鹿児島県北西部に位置し、北側を熊本県水俣市と接する県境の市である。市域南部には紫尾山地が広がる。この紫尾山地と出水平野との境の断層崖下には、シラス台地と高位段丘がある。これに続く、大野原町、野田町、高尾野町の一帯は、洪積台地の扇状地が広大に広がり、この扇状地を囲むように河岸段丘と沖積地が発達する。川除遺跡・下郡山遺跡はこれら沖積扇状地の扇端部に位置する。遺跡の一部は耕作や工事に起因し削平されているが、本来的には斜面が米ノ津川に向かって続いていると思われる。



第2図 川除遺跡・下郡山遺跡の位置

### 第2節 歴史的環境

出水における遺跡は、主に扇状地や扇端部の河岸段丘や山麓縁辺等に多く存在する。

縄文時代の遺跡には牟田尻遺跡（早・前・後期）やカラム遺跡、莊貝塚（前期）、柿内遺跡（中期）、江内貝塚等がある。特に出水貝塚は有名で、大正9年京都大学によって調査され、さらに戦後の調査で貝塚下から縄文早期の押型文土器が出土しており、また貝塚貝層中・上部では縄文中後期の土器も出土している。さらに埋葬人骨も計7体確認されている。縄文晚期の遺跡では沖田岩戸遺跡、中里遺跡が存在している。弥生時代の遺跡は堂前遺跡や下高尾野遺跡が存在し、弥生時代の中期の覆石墓から後期の葺石土坑墓と変化する過程も遺跡を通してうかがえる。さらに古墳時代の地下式石積石室へと移行する変遷を知ることができる。

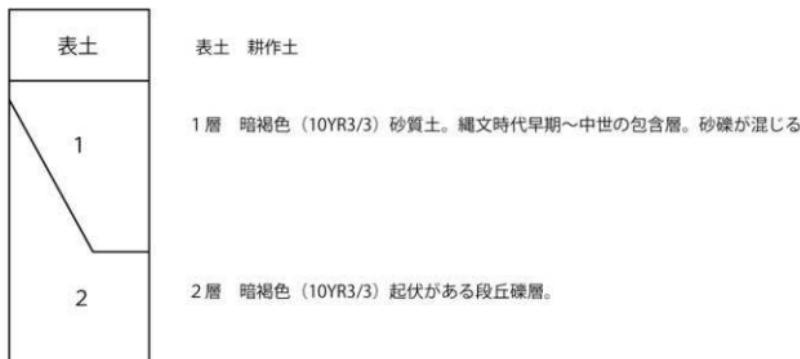
古墳時代では短甲を出土した溝下古墳があり、また出水平野とは別に、八代海と東シナ海をつなぐ黒ノ瀬戸海峡によって隔たれた長島には5~7世紀にかけて高塚古墳が出現している。文献資料で出水の地名があらわれるのは統日本紀宝龜九年11月（778年）の条に遣唐船が出水海岸に漂着した記

載がある。その後は和名類聚抄に「伊豆美」とあり、建久図帳に「和泉郡」として登場する。また延喜式巻十神祇十に「出水郡一座…」の記載がある。「出水」の地名が「和泉」に変化するのは明確ではないが、天承二年（1132年）「平安遺文」第五 2227「僧經覺解」に「偏和泉郷所役也…」とあり、和泉荘の成立をさかのぼる可能性を示唆している。おそらく平安時代には山門院として院が成立し和泉郡から独立して荘園化したと考えられる。そして、島津荘の成立と共に吸収されその後は守護被官本田氏一族の所領に組み込まれている。和泉荘の領有については伴系和泉氏は島津氏と反目し、南北朝の争いを契機に、島津氏と戦い正平九年（1354年）を境にその勢力は島津に移った。そして島津用久が薩州家を興し1425年から約130年間出水を領有することになる。またその過程の中で島津忠久が元暦二年（1185年）に島津荘下司職に補佐され、忠久は木牟礼城に守護被官本田貞親を入部させた。木牟礼城は五代貞久まで薩摩守護所としてその勢力の拠点となった。

そしてこのころから荘園制は崩壊していき、郷村制の村落へと移行していった。その後薩州島津家は豊臣秀吉の九州出兵の後文禄二年（1593年）に改易され一時秀吉の直轄領となる。しかし慶長三年（1598年）に「泗川の戦い」で戦勝し再度島津氏に返還された。この時期の遺跡は主に中世城郭があげられ、出水市内でも多くの城郭が存在している。

### 第3節 基本層序

川除遺跡・下郡山遺跡の基本層序は次のとおりである。表土は耕作土であり、現況では畑作が行われていた。層厚は0.2～1mであり、川除遺跡南部は耕作の影響により包含層が消失していた。1層は遺物包含層である。暗褐色（10YR3/3）砂質土で縄文時代早期～中世の遺物が混在して出土する様相を呈し、明確な文化層を確認することはできなかった。2層は暗褐色（10YR3/3）段丘疊層である。特に川除遺跡側においては起伏が顕著に確認できた。この段丘疊層中からは、遺物を確認することができなかった。



第3図 基本層序模式図



第4図 川除遺跡・下郡山遺跡と周辺の遺跡

表1 川除遺跡・下郡山遺跡と周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	川除遺跡	古墳時代～古代	39	宮ノ脇遺跡	弥生時代
2	下郡山遺跡	縄文時代、古代	40	児玉追遺跡	近世
3	満下古墳群	古代	41	北嶺山遺跡	縄文時代、古代
4	谷城跡	中世	42	会所遺跡	古代、近世
5	桙松遺跡	古代	43	牛ヶ迫東平遺跡	中世
6	庵木湖遺跡	縄文時代、古墳時代	44	松尾城跡	中世
7	堤原遺跡	中世	45	瀬訪後遺跡	縄文時代、古代
8	堀込遺跡	縄文時代、古代	46	朝雲城跡	中世
9	扶六遺跡	縄文時代、近世	47	安原跡遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代
10	北吉子遺跡	縄文時代、古代	48	安原城跡	中世
11	上松遺跡	縄文時代	49	美原上ノ原遺跡	縄文時代
12	下春川遺跡	古墳時代	50	平松遺跡	縄文時代、古墳時代、平安時代
13	御堂遺跡	古墳時代～中世	51	山ノ段遺跡	縄文時代、近世
14	穴水遺跡	縄文時代	52	山ノ田B遺跡	旧石器時代、縄文時代、近世
15	西宮ノ脇遺跡	古墳時代	53	山ノ田A遺跡	縄文時代
16	六反ヶ丘遺跡	古墳時代	54	狩集遺跡	縄文時代
17	野中田遺跡	古代	55	加紫久利山遺跡	縄文時代、近世
18	正八幡遺跡	縄文時代～古代	56	野細遺跡	縄文時代、中世、近世
19	山下遺跡	古代～中世	57	野細C遺跡	縄文時代、中世、近世
20	冉原遺跡	古代	58	坪ノ前遺跡	古墳時代
21	慶願原遺跡	古代	59	野間原遺跡	縄文時代、近世
22	新村A遺跡	古代	60	永坂遺跡	縄文時代
23	尾崎B遺跡	縄文時代（後期・晩期）、古代、中世、近世	61	孫山遺跡	縄文時代
24	新村B遺跡	古代	62	野間の岡跡	中世（安土桃山）～近世
25	尾崎A遺跡	縄文時代（後期・晩期）、古代、中世、近世	63	坪ノ後遺跡	縄文時代
26	尾崎城跡	中世	64	永坂下ノ元段遺跡	縄文時代、近世
27	表郷東遺跡	中世	65	野間遺跡	縄文時代
28	八幡遺跡	古代、中世	66	外間遺跡	縄文時代、古代
29	西茶園原遺跡	古代	67	供養元遺跡	縄文時代
30	高見下遺跡	縄文時代	68	長松寺遺跡	縄文時代
31	一町塙遺跡	古墳時代	69	東福ノ江遺跡	縄文時代
32	天神原遺跡	古墳時代	70	西福ノ江遺跡	縄文時代
33	成願寺遺跡	弥生時代～古墳時代、安土桃山	71	新栽遺跡	縄文時代
34	田中遺跡	弥生時代	72	下大野原下ノ原遺跡	近世
35	内城跡	中世	73	金松遺跡	古墳時代
36	成願寺跡	安土桃山～江戸	74	中尾遺跡	古墳時代～中世
37	専修寺跡	室町時代～明治3年	75	野添遺跡	縄文時代～古代
38	神田岩戸遺跡	縄文時代（晩期）、古代	76	前原遺跡	弥生時代～古代

※番号は第4図の番号と一致する

# 第3章 川除遺跡



## 第3章 川除遺跡

### 第1節 調査の方法

平成24年7月2日より調査に着手した。調査区内は雑草が繁殖していたため、まず除草作業から着手し、その後、重機による表土（耕作土）、攪乱部分の除去を行い、確認調査で遺物・遺構を検出した層位まで掘下げた。川除遺跡中央部には樹根列が北・西に存在したが、重機で抜根することは、その下位に遺構が存在した場合破壊に繋がる為、当初は残すこととし、調査の状況に応じてチェーンソーや鋸で抜根することとした。

この樹根列に囲まれたエリアは包含層が良好に残存していたが、その他の箇所については耕作に起因する攪乱が著しく確認された。攪乱土を除去すると礫層が露出したため、調査は必然的に樹根列に囲まれたエリアに集中することとなった。

重機による掘削の後、人力で遺構検出・包含層掘削を行うとともに、10mグリッドを設定した。

遺物は縄文土器や陶磁器などが同一層位内で混在して出土する様相を呈し、時代区分毎の文化層は確認できなかった。これら遺物はトータルステーションを用いての単点測量もしくはグリッド単位で取上げた。遺物とともに当初の想定数を超える礫集石が検出された。調査時点においても縄文時代早期の集石遺構との相違点が確認されたが、後の資料検討のためにも実測することにした。樹根列に囲まれたエリア以外の箇所に関しては、遺構検出作業を丹念に実施したが、遺構は確認されなかった。

礫集積調査後、その下位の埋蔵文化財残存状況を調査するため、10mグリッド内を互い違いに礫層まで人力で掘下げた。結果として遺物・遺構は確認されず、川除遺跡の調査を9月28日に終了した。

### 第2節 調査の概要

川除遺跡からは縄文時代早期から中世にかけての遺物・遺構が出土している。これらの遺物は同一層位において混在して出土していたのが実情であり、整理作業における分析においても明確な文化層を確認することは叶わなかった。

縄文時代早期・後期から晩期にかけての遺物は確認されるがごく少数に限られる。石器は石鏃の他、剥片・2次調整剥片が多いことから一時的なキャンプサイトとしての利用、そして、そこでの石器製作が考えられる。後述する下郡山遺跡で主体的に出土する古墳時代の生活痕跡は遺構が確認されなかつたから不明瞭といわざるを得ない。

古代から中世にかけての皿や陶磁器類が出土しているが、これらは下郡山遺跡においてはあまり見られないものである。これらは近隣の中世山城もしくは郡衙との関連が想起されよう。

遺構としてはSI1、SI4～SI6、SI8～SI11、SI13～SI17の合計13基の礫集積が検出された。検出箇所としては、調査区中央部北側に限定されている。これは調査区南側・東側が耕作の影響を受け、包含層が礫層まで消失していることから、本来的には調査区全体に遺構が分布していた可能性がある。

礫集積は全体的に小ぶりなものとやや散漫な状態ながら一定の面積に広がるものがある。構成礫は拳大の亜円礫が多数を占め、数cmの小礫も混じる。通常想起される縄文時代早期の集石遺構の構成礫に対し、赤色化がなされず破碎礫も少ない。また炭化物や明確な掘込みを有するものが少ないなど相違点が多い。これらの礫集積を検出した層位の下層からは段丘礫が確認されていることから、遺構検出面において礫集積と段丘礫層上面が混在していたと考えられ、このことが、前述した従来の集石

遺構の知見の差異を生じさせているものと考えられる。いずれにせよ、縄文時代早期以降においても段丘礫層上位の黒色土が発達せず、段丘礫を使用して礫集積を構築もしくは避けるように土地利用をしていたと考えられる。これら礫集積の個別諸元については後述する。

礫集積の検出と合わせ、遺構検出を行ったがその他の遺構は検出されなかった。

### 第3節 縄文時代の調査

#### 1. 遺構

##### 礫集積（第5～8図）

前項で記述した通り、川除遺跡においては礫集積を検出している。しかしながら、縄文時代早期において検出される集石遺構とは性格を異にするものである。また、縄文時代の遺物と、その他の時代の遺物が混在して出土する様相を呈しているため、縄文時代の遺構に該当しない可能性もあるが、本項において報告したい。

川除遺跡の礫集積には①構成礫が密集しているもの（SI1、SI5、SI10、SI14）、②構成礫がある程度のまとまりを持って散漫に分布するもの（SI4、SI6、SI9、SI11、SI13）、③構成礫がある程度のまとまりをもって広範囲に分布する（SI8、SI15、SI16、SI17）という3パターンに分けることが可能である。いずれのパターンも明確な掘込みは無く焼土も確認できなかった。構成礫中に砂、小礫（小石）が含まれるのはパターン③であり、礫集積の範囲が小さくなるほど構成礫に含まれる小礫の比率が激減する。

パターン①や②に該当する礫集積は、検出された礫以外に構成礫は無かった。

パターン③に該当するSI8は3.5m×2.0mの歪な長方形の中にやや散漫な状態で礫が密集する。形態的な特徴や、付近から陶磁器片が出土したこともあり積石墓の可能性も考慮して調査を行った。構成礫からは石塔の残骸や、その他祭祀に関連する遺物の出土は無いことから、積石墓の可能性は限りなく低いものと考えられる。

また、パターン③の礫検出状況は、礫集積を検出する前に礫が広がる状況に酷似していたため、実測作業の後、礫を除去して下位を確認したが、砂混じりの礫が検出されるパターンもあり、半裁した結果からも段丘礫の可能性が高いものであった。

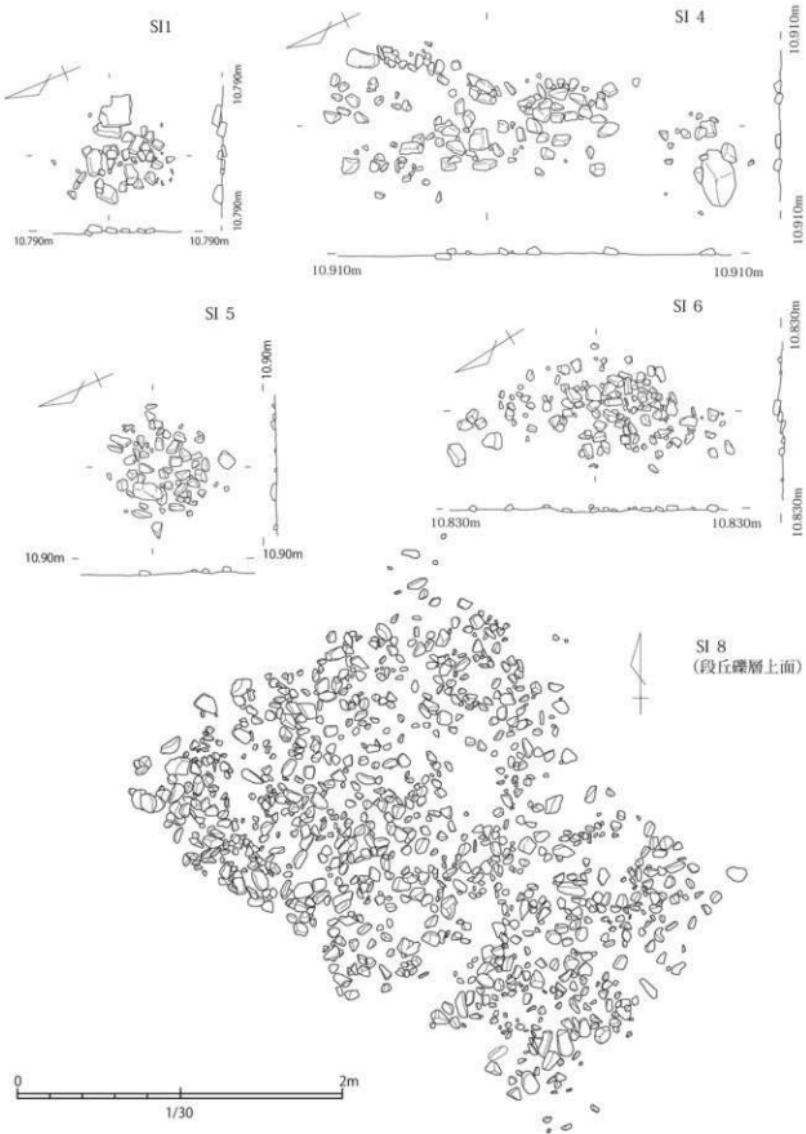


凡例

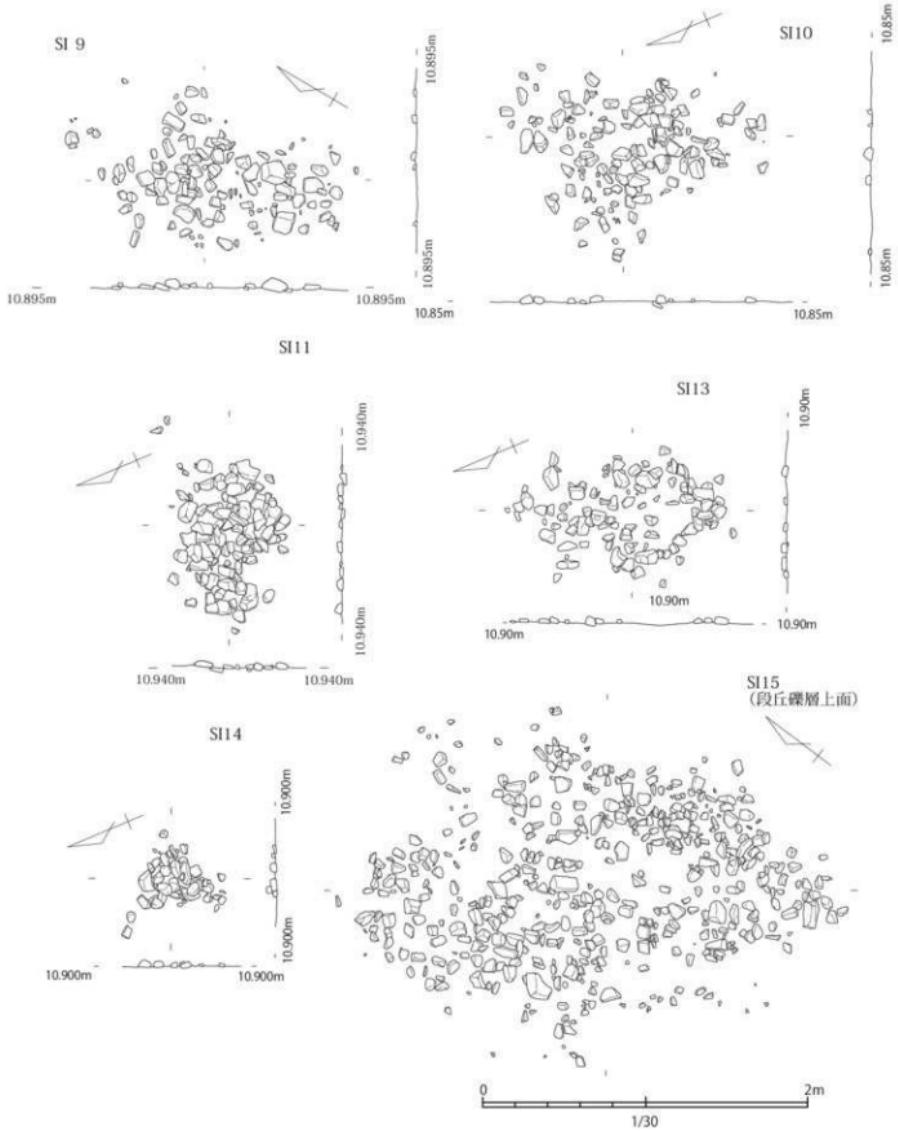
- (○) パターン①
- (○) パターン②
- (●) パターン③

0 20m  
1/300

第5図 川除遺跡遺構分布図

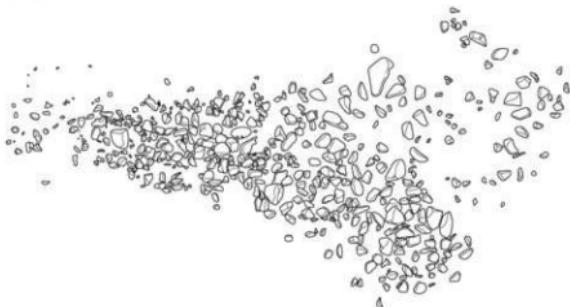


第6図 川除遺跡礫集積（1）

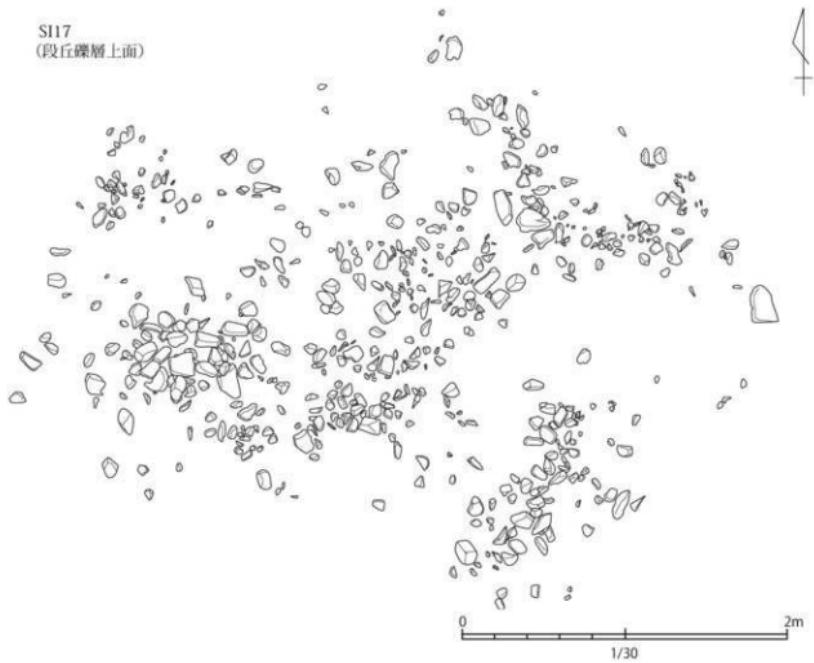


第7図 川除遺跡疊集積（2）

SI16  
(段丘疊層上面)



SI17  
(段丘疊層上面)

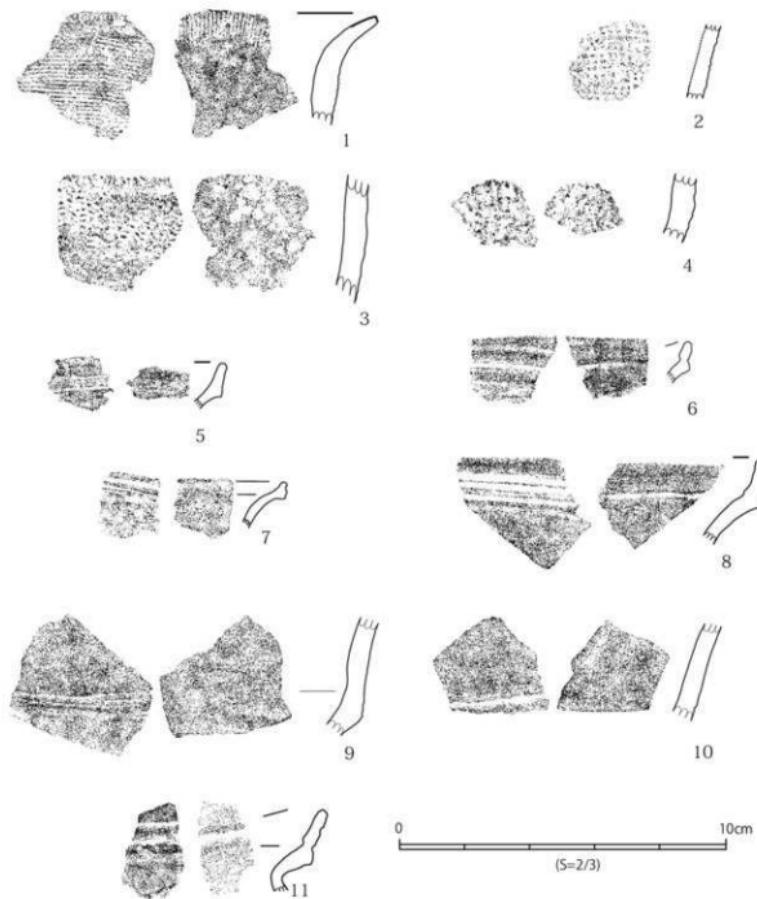


第8図 川除遺跡礫集積（3）

## 2. 遺物

### (1) 土器 (第9図)

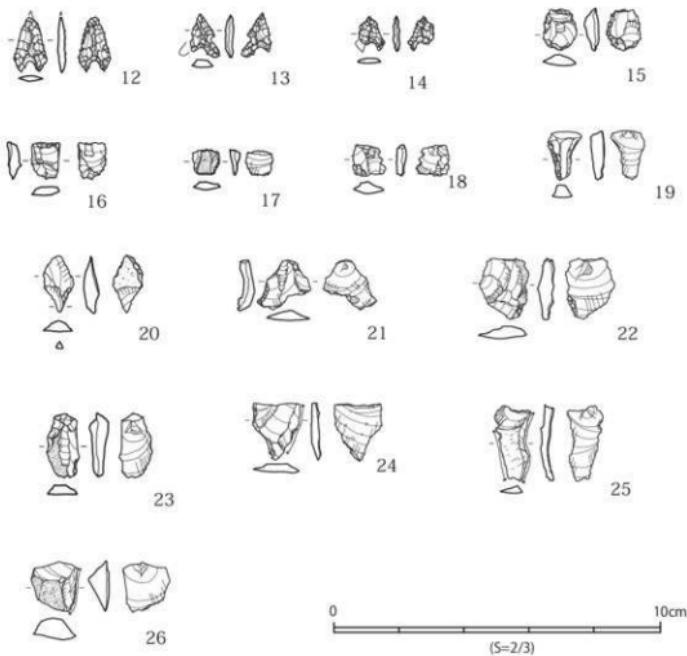
1は大きく外反する口縁部を持ち、表面に撚糸文を施している。裏面はナデ調整を施した後に、口縁部のみ原体条痕を意識したと考えられる線刻が施されている。また口唇部に刻目文が施される。2～4は押型文土器である。2は外面に縦方向の梢円押型文を施す。内面調整は観察できない。3は外



第9図 繩文土器実測図

面に不定方向の山形押型文を施している。5～11は黒色磨研土器である。このうち5～8、11が口縁部、9～10が胸部である。口縁部は、頸部から大きく外反し「く」の字状を成す。内外面とともにミガキにより丁寧に器面調整が施される。口縁部には沈線文を施さないもの（5）、1本の沈線文を施すもの（6）、2本の沈線文を施すもの（7）、口唇部にヒレ状の突起がつくもの（11）がある。胸部は9にみられるように、張出部において、「く」の字状に緩やかに屈曲し、沈線文を施す。

(2) 石器 (第10・11図)



第10図 石器実測図(1)

多数の黒曜石製剥片・碎片が出土したが、石鎌に代表される製品類の出土は、今回掲載した遺物にとどまる。小型の石器は全て黒曜石製である。

12～14は石鎌である。3点とも異なる形態を成している。15～18は小型のスクレイパーである。

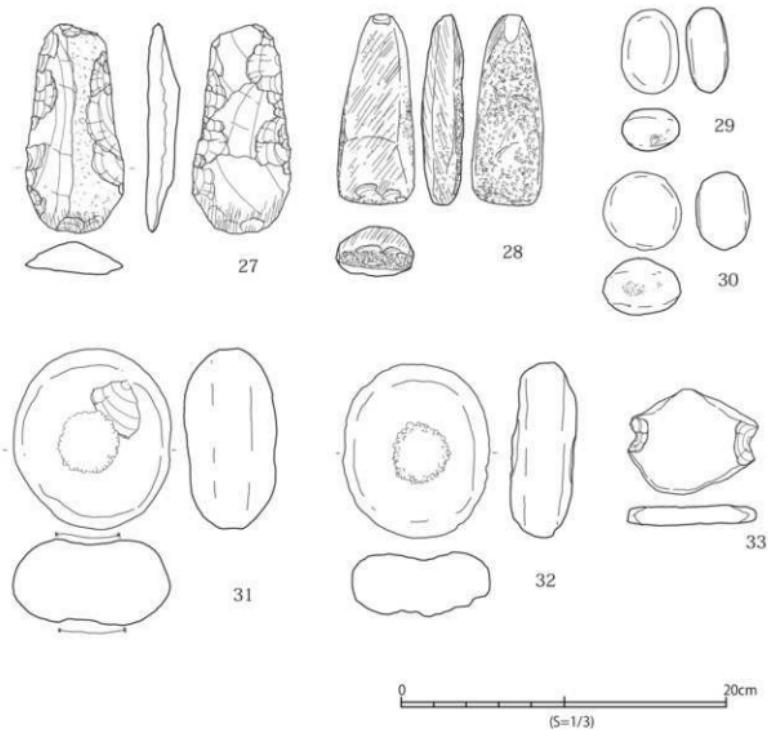
19～20は2次調整剥片の内、一方の側辺のみに調整を施したものである。形態から石錐的な使用法が成されたと推測される。

21～23は2次調整剥片である。不定形剥片を使用し、23は自然面が残る。このような2次調整剥片は多数出土している。

24～26は使用痕剥片である。剥片の側辺を刃として用いたもので、使用痕が観察できる。

27は局部磨製石斧である。砂岩の母岩から獲得した扁平な剥片を素材とし、側辺部に形態を整えるために調整を施す。その後、刃部を研磨している。

28は磨製石斧軸用叩石である。磨製石斧の刃部が欠損し、再加工を行わず叩石として使用したと考



第11図 石器実測図(2)

えられる。

29～30は叩石である。砂岩製で拳大より小振りなものを選択し使用している。

31～32は磨石である。扁平な円盤を使用し木の実等を加工したものと考えられる。使用痕は観察されるが、加工痕は観察できなかったため、自然石をそのまま使用したものと推測される。

33は石錘である。扁平な輝石安山岩を素材とし、長軸部両端を表裏面から打欠き形成されている。紐をかけた痕跡は明確に観察できなかった。

#### 第4節 弥生時代以降の調査

川除遺跡からは少數ながら弥生時代の遺物が出土している。また古墳時代の土師器も出土したが、ほとんどが小片であることから、今回、図示するに至らなかった。他に古代～中世にかけての遺物も出土している。いずれも小片～碎片であり図示には至らなかったが、その出土量は下郡山遺跡よりも多いことを記載しておく。

前述したように遺物の出土は確認されたものの、遺構は確認されなかった。第12図34の周辺に土坑墓が存在する可能性のもと遺構検出を実施したが、遺構は検出されなかった。掘立柱建物跡に由来する柱穴も検出されていない。

##### 出土遺物（第12・13図）

34は長頸壺の胴部である。そろばん玉の形状を成し、外面はミガキにより丁寧に器面調整が施される。内面はハケによる調整が施されている。

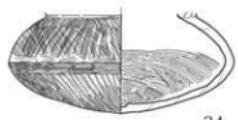
35～36は高环の坏部である。36は口径24.6cmと大きく外反する口縁部で坏部中央に稜があり、そこから、ふくらんだ鉢状を呈し脚部に至るものと推測される。37～39は高环の脚部である。37は脚根部の四方に焼成前の穿孔がある。

40～43は土師皿である。底部は糸切の跡が残る。44は坏である。

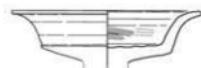
45～48は青磁碗である。45は南宋13世紀頃の所産と推定される。46～48は45と比べ、釉が青みを帯びているなどの違いがみられるため、国産品の可能性が高い。

49～51は管状土錘である。52は土製の円盤である。器面調整は土師器と同一であり、破損した土師器片を加工して作成されたものと考えられる。

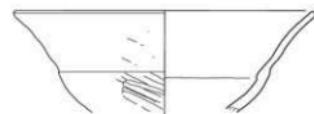
53は滑石製の石鍋片である。



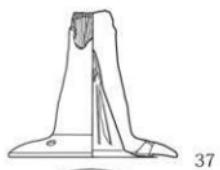
34



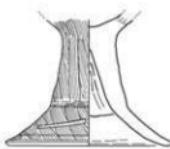
35



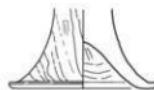
36



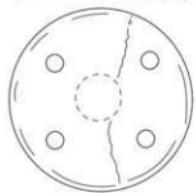
37



38



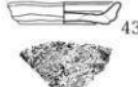
39



40



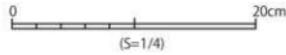
42



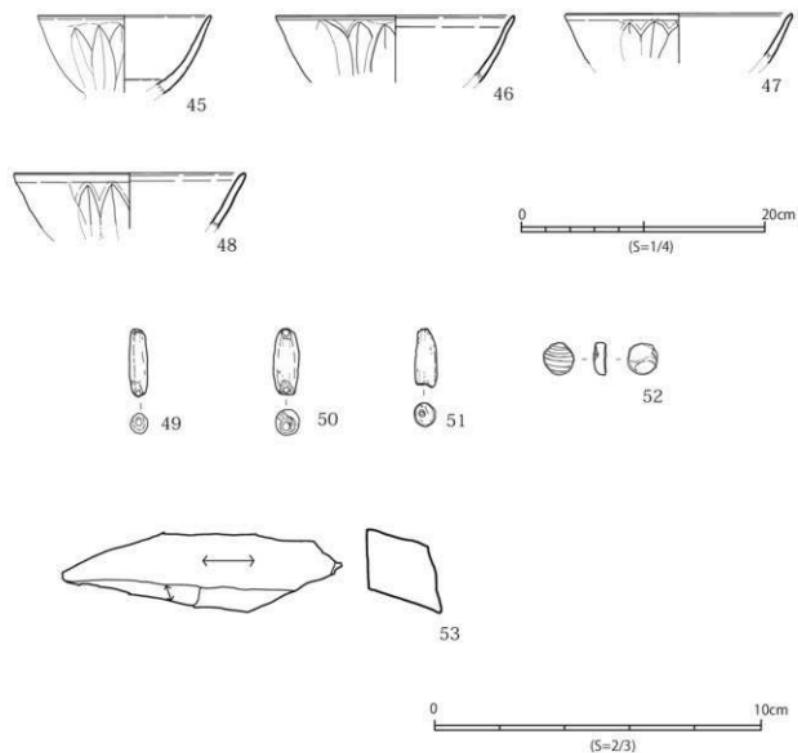
43



44



第12図 弥生時代～中世遺物実測図



第13図 中世の遺物実測図

表2 川除遺跡土器観察表

遺物番号	遺物番号	種別	測定	測定地點	形態 (cm)		器型		色調		年代	参考	
					上部	底部	側面	内部	外側	内側			
9	284	土器	1脚	—	—	—	高身文、口縁部に網目 ナギ、口縁部に条状文	丸腹	灰白・青褐色	灰白・青褐色	1913.1.27.1000.015.001		
	285	土器	1脚	—	—	—	口縁部堅突	丸腹	褐色	褐色	1913.1.27.1000.015.002		
	286	土器	1脚	—	—	—	山形押塑文	ナギ	褐色	褐色	1913.1.27.1000.015.003		
	287	土器	1脚	—	—	—	口縁部堅突	丸腹	褐色	褐色	1913.1.27.1000.015.004		
	288	土器	1脚	—	—	—	口縁部堅突	丸腹	褐色	褐色	1913.1.27.1000.015.005		
	289	土器	1脚	—	—	—	口縁部堅突	丸腹	褐色	褐色	1913.1.27.1000.015.006		
	290	土器	1脚	—	—	—	口縁部堅突	丸腹	褐色	褐色	1913.1.27.1000.015.007		
	291	土器	1脚	—	—	—	口縁部堅突	丸腹	褐色	褐色	1913.1.27.1000.015.008		
	292	土器	1脚	—	—	—	口縁部堅突	丸腹	褐色	褐色	1913.1.27.1000.015.009		
	293	土器	1脚	—	—	—	口縁部堅突	丸腹	褐色	褐色	1913.1.27.1000.015.010		
	294	土器	1脚	—	—	—	口縁部堅突	丸腹	褐色	褐色	1913.1.27.1000.015.011		
12	34	高脚壺	脚部一也頭	1脚	—	—	前方凹凸窓一側圓弧狀 後方凹凸窓一側圓弧狀	高身に凹窓付の側圓弧状、下方 に窓付の側圓弧状、後方には窓付の側圓弧状	灰褐色	褐色	1913.1.27.1000.016.001		
	35	高脚	共用	1脚一頭	(15.1)	—	—	ナギ	灰色	青褐色	1913.1.27.1000.016.002		
	36	高脚	共用	泡吹窓一頭	(20.0)	—	—	口縁	褐色	褐色	1913.1.27.1000.016.003		
	37	高脚	脚部	表土	—	(11.0)	—	ナギ、底近部堅突	ナギ	灰白・褐色	1913.1.27.1000.016.004		
	38	高脚	脚部	1脚	—	13.1	—	ナギ	褐色	褐色	1913.1.27.1000.016.005		
	39	高脚	脚部	表土	—	(10.0)	—	ナギ	灰白・褐色	灰白・褐色	1913.1.27.1000.016.006		
	40	共	CIM-他原	CIM-レンド 1脚	(10.0)	(4.4)	—	口縁ナギ	口縁ナギ	口縁ナギ	1913.1.27.1000.016.007		
	41	共	CIM-他原	CIM-レンド 1脚	(9.0)	(3.2)	—	口縁ナギ	口縁ナギ	口縁ナギ	1913.1.27.1000.016.008		
	42	共	CIM-他原	—	10.3	(3.1)	—	口縁ナギ	口縁ナギ	口縁ナギ	1913.1.27.1000.016.009		
	43	共	CIM-他原	—	9.8	(3.4)	—	口縁ナギ	口縁ナギ	口縁ナギ	1913.1.27.1000.016.010		
	44	共	CIM-他原	—	12.0	(4.4)	—	口縁ナギ	口縁ナギ	口縁ナギ	1913.1.27.1000.016.011		
13	45	共	CIM-他原	1脚	(14.2)	—	—	破片	—	褐色	褐色	1913.1.27.1000.017.001	
	46	共	CIM-他原	1脚一頭	(13.3)	—	—	破片	—	褐色	褐色	1913.1.27.1000.017.002	
	47	共	CIM-他原	1脚一頭	(13.3)	—	—	破片	—	褐色	褐色	1913.1.27.1000.017.003	
	48	共	CIM-他原	1脚一頭	(13.4)	—	—	破片	—	褐色	褐色	1913.1.27.1000.017.004	
	49	土器	—	—	—	—	ナギ	—	—	灰白・褐色	灰白・褐色	1913.1.27.1000.017.005	
	50	土器	—	—	—	—	ナギ	—	—	灰白・褐色	灰白・褐色	1913.1.27.1000.017.006	
	51	土器	—	—	—	—	ナギ	—	—	灰白・褐色	灰白・褐色	1913.1.27.1000.017.007	
	52	円筒土製品	—	—	—	—	口縁	口縁ナギ	—	灰白・褐色	灰白・褐色	1913.1.27.1000.017.008	辯才天・別天丸・厚生

表3 川除遺跡石器・石製品観察表

插図番号	遺物番号	器種	出土地名	石材	法量			
					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
10	12	石鏹	1層	黒曜石	2.4	1.5	0.4	2.3
	13	石鏹	1層	黒曜石	2.1	1.4	0.4	1.4
	14	石鏹	1層	黒曜石	1.6	1.2	0.3	1.3
	15	スクレイバー	一括	黒曜石	2.1	1.7	0.7	1.6
	16	スクレイバー	1層	黒曜石	1.6	1.3	0.6	1.3
	17	スクレイバー	一括	黒曜石	1.1	1.1	0.4	1.1
	18	2次調整剥片	一括	黒曜石	1.6	1.6	0.5	1.4
	19	2次調整剥片	1層	黒曜石	2.6	1.8	0.7	1.5
	20	2次調整剥片	1層	黒曜石	2.6	2.4	0.7	1.4
	21	2次調整剥片	1層	黒曜石	2.6	2.8	0.9	2.2
	22	2次調整剥片	1層	黒曜石	2.8	2.7	1.9	2.5
	23	2次調整剥片	一括	黒曜石	2.6	1.5	0.9	2.1
	24	使用痕剥片	一括	黒曜石	4.0	2.6	0.4	4.0
11	25	使用痕剥片	1層	黒曜石	3.7	1.9	0.7	2.3
	26	使用痕剥片	一括	黒曜石	2.7	2.6	1.2	7.3
	27	打製石斧	No124	溶結凝灰岩	12.9	6.1	2.1	401.3
	28	磨製石斧	1層	砂岩	11.9	4.8	2.6	354.4
	29	叩石	1層	砂岩	4.7	3.2	2.4	240.0
	30	叩石	1層	溶結凝灰岩	5.9	3.2	2.3	271.0
	31	磨石	1層	砂岩	11.1	9.7	5.7	500.0
	32	磨石	1層	溶結凝灰岩	10.7	9.0	4.0	482.0
	33	石錐	1層	輝石安山岩	6.5	8.2	1.3	100.0
	13	53	石鏹	1層	滑石	-	-	-

## 第5節 小結

### 1. 縄文時代

川除遺跡において生活痕跡が確認された最も古い時期が縄文時代早期である。遺物としては押型文土器の出土が見られる。胴部片であり、詳細な帰属時期は不明瞭であるが、山形押型文が斜走して施してあることから下菅生B式並行期以降の所産であると考えられる。これらは東九州、南九州ではあまり見られないが、熊本県域を中心とする西九州では普遍的に見られる型式であり、出水市域の地理的特性をよく表しているともいえる。

また、表面に絡状体圧痕（撫糸？）を施した土器が1点出土しているが、これも上記の様相で捉えて良かろう。

縄文時代前期に該当する遺物・遺構は出土しなかった。縄文時代後期～晩期の遺物として鳥井原式から黒川式の時期にかけての土器が出土している。同一型式毎の出土量はごく少数にとどまり、かつ口縁部片や胴部片のみの出土に限られることから流れ込みの可能性も捨てきれない。

川除遺跡からは上述する時期の土器が出土しているが、文化層が判然としない出土状態であり、出土した石器の帰属時期に関しては不明瞭と言わざるを得ない。

石斧に代表される礫石器の出土は、今回掲載したものに限られ、製作痕跡を示す剥片や2次調整剥片の類の出土は見られなかった。

一方で黒曜石製の剥片等は比較的まとまった出土が認められる。黒曜石の大部分は日東産のものであり、腰岳産がそれに続く。原石の出土は無かったが、出土資料からは比較的小ぶりなものを持込み加工していたと考えられる。これら黒曜石で作られた石器の出土は、今回掲載した3点に留まる。一方で石鎚未成品と考えられる2次調整剥片や、石器製作に起因する碎片が数多く確認されることから、川除遺跡は一時的なキャンプサイトとして活用されており、ここで作成した石器を他の場所で使用したものと考えられる。当時の海岸線を考えると、当遺跡周辺はまだ海が広がっていた可能性が高く、紫尾山地や上場方面で狩猟活動を行っていた人々の行動終末点であったことが想起されよう。

続いて、礫集積について検討する。再三記述していることであるが、川除遺跡においては各時代・時期の遺物が同一層内において混在して出土した。そのため、同じ層位で検出した礫集積の帰属時期も不明瞭のままである。当節においては、その帰属時期について複数の想定を示しまとめに変えたい。

#### ①中世積石墓

川除遺跡周辺に中世山城が存在し、発掘調査時においても中世に属する遺物が出土したため中世の積石墓に類する遺構と想定し調査を実施した。特にSI8は、いびつな長方形のエリア内に礫が密集したため、一字一石絆や石塔の残骸などが存在する可能性を踏まえ、構成礫を詳細に観察したが、それらしきものは存在しなかった。また埋葬主体も確認されなかつたことから中世積石墓としての利用の可能性は著しく低いと言わざるを得ない。

#### ②礫集積

前節にて報告した通り、川除遺跡の礫集石は、縄文時代早期の集石遺構とは異なる点を有するものが多い。そのような中でSI1に代表されるものは、構成礫中に砂や小礫を含まない。確かに明確な掘り込みは確認されなかつたが、表土（耕作土）の直下から礫集積が検出される場合もあり、掘り込み自体が消失している可能性もある。焼石も少数に留まるが、これらは集石遺構を使用す

る際の準備段階、もしくは使用礫を集積している段階の可能性があると思われる。

### ③段丘礫

礫集積の構成礫には小礫や砂が含まれているものがある。点在する礫集積の3箇所で、礫集積部分の下位を観察したところ、礫集積と下層の基盤礫層の間に砂礫が円錐状に連続して堆積している状況が確認された。この現象について成尾英二氏（元県立博物館学芸員）に現地で指導をいただいた。結果、礫集積は礫層からなる段丘が形成される過程で、礫層上面が水平ではなく、全体的に幾重にも起伏に富んだ凸凹した地形を呈し、平面観察で礫層の凸部の上端部分が露呈したことによるのではとのご教示を得た。

以上、3点について検討したが、可能性としては③の段丘礫の中に②の縄文時代集石遺構が混在する様相が推測され、縄文時代の集石遺構としての可能性を残しておきたい。

## 2. 弥生時代～中世

長頸壺（34）が1点出土した。SI 9付近からの出土であり、土坑墓の副葬品の可能性も含め周辺を精査したが、それらしき遺構は確認されなかった。

今回の調査では遺物が数多く出土しており、その点から遺構検出に期待した。出土した遺物を時代別に見ると弥生時代のものでは壺や高环、弥生時代末から古墳時代の初めと考えられる赤彩の高环などが出土している。古墳時代では細片であるが須恵器片を出土し、古墳時代以降では糸切り底の土師皿や环がみられる、これら遺物が出土した背景には直接遺物に関係がないものの、近くにある溝下古墳群の存在も大きく古墳時代の遺跡である可能性は強い。古墳時代以降は遺物をみても出土量は少なく、時代を示す顕著なものでは青磁碗が出土している。時期は13世紀頃の所産と考えられる。遺物のみで遺跡の様相を概観することは若干難点はあるが、少なくとも弥生時代から中世まで当遺跡周辺に多くの遺跡が存在する可能性は大きいといえる。



# 第4章 下郡山遺跡



## 第4章 下郡山遺跡

### 第1節 調査の方法

下郡山遺跡の発掘調査は平成24年8月3日から開始した。川除遺跡同様に雑草が繁殖していたため、これらの処理を行った後に、重機による表土除去を開始し、確認調査で遺物・遺構を検出した層位まで掘り下げた。下郡山遺跡中央部には樹根列が南北に存在したが、重機で抜根することは、その下位に遺構が存在した場合破壊に繋がる為、当初は残すこととし、調査の状況に応じてチェーンソーや鋸で抜根することとした。

表土除去が終わった箇所から包含層掘削・遺構検出を実施した。遺物は縄文土器・石器が散漫な出土状況を見せ、その中に土師器が混在していた。遺物は小片が主体であったことから一括で取上げ、遺構検出作業を継続した。遺構検出作業を実施している中で、遺物がまとまって出土している箇所が数箇所見受けられた。窪地に流れ込んだ遺物とも想定されたが、遺物がある程度の大きさを有しており、ローリングも受けていないことから、何らかの遺構があることが推測された。土色の差異を詳細に観察したが、当初は地山と埋土の区別をつけることが困難であり調査が難航した。確認調査で検出されたSH1のプランを確認するため確認調査時のトレントを拡張し、土層堆積状況を観察している中で、トレント南東壁面に竪穴状遺構と思われる立上がりが確認された。これをもとに、土層観察用のセクションベルトを設定しサブトレントを入れつつ、プランの中心部から壁面向かい掘り進んだ。同様な手法で他の竪穴状遺構を検出・調査を実施し、9月28日に調査を終了した。

### 第2節 調査の概要

下郡山遺跡からは縄文時代早期、後期後半～晚期、古墳時代、中世にかけての遺物と、弥生時代末から古墳時代にかけての遺構が検出された（第16図）。このうち主体的なものは古墳時代であり縄文時代がそれに続く。先に報告した川除遺跡とは主体的な土地利用時期が異なっており、当時の土地利用を考える上で非常に興味深いデータを提供している。

遺構には、古墳時代の竪穴状遺構8基が検出された。SH2、SH3、SH6、SH8は、平面プランが方形を呈し、規模も類似している。これらの長軸線はSH2とSH6、SH3とSH8はほぼ同じ方向の2つのタイプがあり、これらは約90°位置が振れている。

竪穴状遺構の床面には硬化面や柱穴等は確認できないが、SH2～4、SH6、SH8は形状や規模から竪穴住居が想定される。なお、竪穴状遺構の付帯施設としてSH3からは地床炉、SH4からは石囲炉が検出された。

また、遺構（埋土中も含め）からは、土器片が多数出土しているが、土器の出土状況から土器の廃棄場が考えられる。なお、これら竪穴状遺構は段丘礫（小礫）混じりの土を掘り込み形成され、同じ土が埋没していたことから検出・調査は困難を極めた。同地区における住居調査の初例であり、今後、同様な事例が出てくることが予想されるため、検出状況～調査経過に關し、次節以降で詳述する。

### 第3節 縄文時代の調査

下郡山遺跡においては、縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物として川除遺跡と同様なものが出土している。

#### 出土遺物

##### 1. 土器（第14図）

54は表面に縄文が施されている。裏面はナデ調整である。

55～64は黒色磨研土器である。このうち55～60が口縁部、61～63が胴部である。口縁部は、頸部から大きく外反し「く」の字状を成す。内外面ともにミガキにより丁寧に器面調整が施される。口縁部には1本の沈線文を施すもの（55）、3本の沈線文を施すもの（57）、がある。

胴部は61にみられるように、張出部において、くの字状に緩やかに屈曲し、沈線文を施す。

64は高杯の脚部である。円筒形で中央部に透しが施される。

##### 2. 石器（第15図）

多数の黒曜石製剥片・碎片が出土したが、この石材を素材とする製品の出土は無かった。黒曜石製石器の大多数は剥片で、2次調整剥片がそれに続く。

65は楔形石器である。

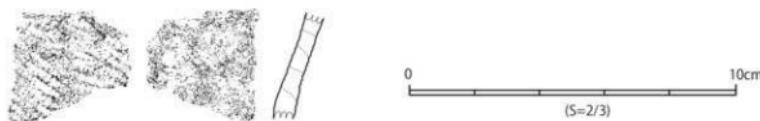
66～69は2次調整剥片である。何らかの未成品もしくは、製作過程において放棄したものと考えられる。70～73は使用痕剥片である。側辺の一辺を刃部として使用している。

74はノミ型石斧である。小型で扁平な自然石を素材とし、端部を研磨することで刃部を形成している。

75は局部磨製石斧である。自然面と主要剥離面を大きく残し、周辺を形状整形のために調整を施している。その後、端部を研磨し刃部を形成している。

76は打製石斧である。両端部は欠損している。主要剥離面を大きく残すものと考えられる。

77は磨製石斧である。使用により欠損したのか、刃部等は消失している。敲打の後に丁寧に研磨されている。



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64

第14図 繩文土器実測図



65



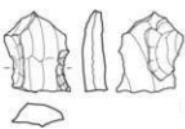
66



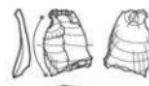
67



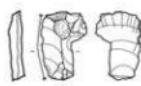
68



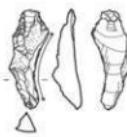
69



70



71

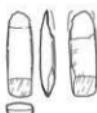


72

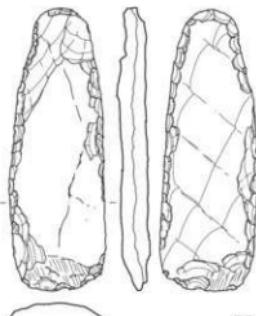


73

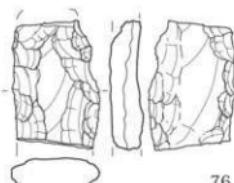
0 10cm  
(S=2/3)



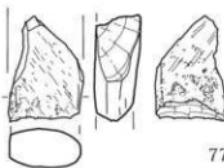
74



75



76



77

0 20cm  
(S=1/3)

第15図 石器実測図

## 第4節 弥生時代～古墳時代の調査

### 概要

2層を掘り込んだ竪穴状遺構が8基検出された。形態や規模から竪穴住居跡の可能性があるが、ここでは竪穴状遺構として説明する。

下郡山遺跡においては竪穴状遺構からは、多数の土器が出土した。その全ては破片資料であり完形資料は無い。しかし、出土土器は型式学的なまとまりが見受けられるため、以下のとおり類型化し報告する。

#### 1. 豌

口縁部・底部の形状を細分化し、その組合せで器形分類を行った。各部位の分類は以下の通りである。

##### (1) 口縁部

口縁部から頸部の形状により分類する。

A類 逆L字形の口縁部。弥生時代の豌

B類 「く」の字状。頸部の稜線が明確

C類 B類よりも立ち上がり角度が大きく、直立気味に緩やかに広がる。頸部の稜線が不明瞭

D類 C類よりも立ち上がり角度が大きい。直立気味で頸部の稜線が不明瞭



A類



B類



C類



D類

##### (2) 底部

脚部内面の形態により分類する。

①類 丸いもの

②類 平坦なもの

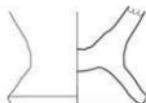
③類 下方に若干膨らむ



①類



②類



③類

## 2. 蓋

口縁部の形状を細分化し分類を行った。各部位の分類は以下の通りである。

### 口縁部

口縁部から頸部の形状により分類する。

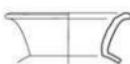
A 類 頸部から屈曲部にかけて外反し、そこから直口する。2重口縁蓋

B 類 頸部で若干直立し、そこから口縁部にかけて外反する

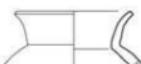
C 類 頸部から直接斜め上方に直線的に伸びる



A 類



B 類



C 類

## 3. 高坏

坏部の形状により分類する。

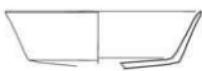
A 類 中ほどで屈曲し外反する口縁部を持つ

B 類 屈曲部から斜め上方に伸びる

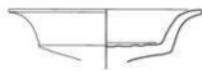
C 類 屈曲部から斜め上方に伸び、外反する口縁部を持つ



A 類



B 類



C 類

## 4. 坪

体部と口縁部の間に、稜線が入る。底部の形状により分類した。

A 類 丸底

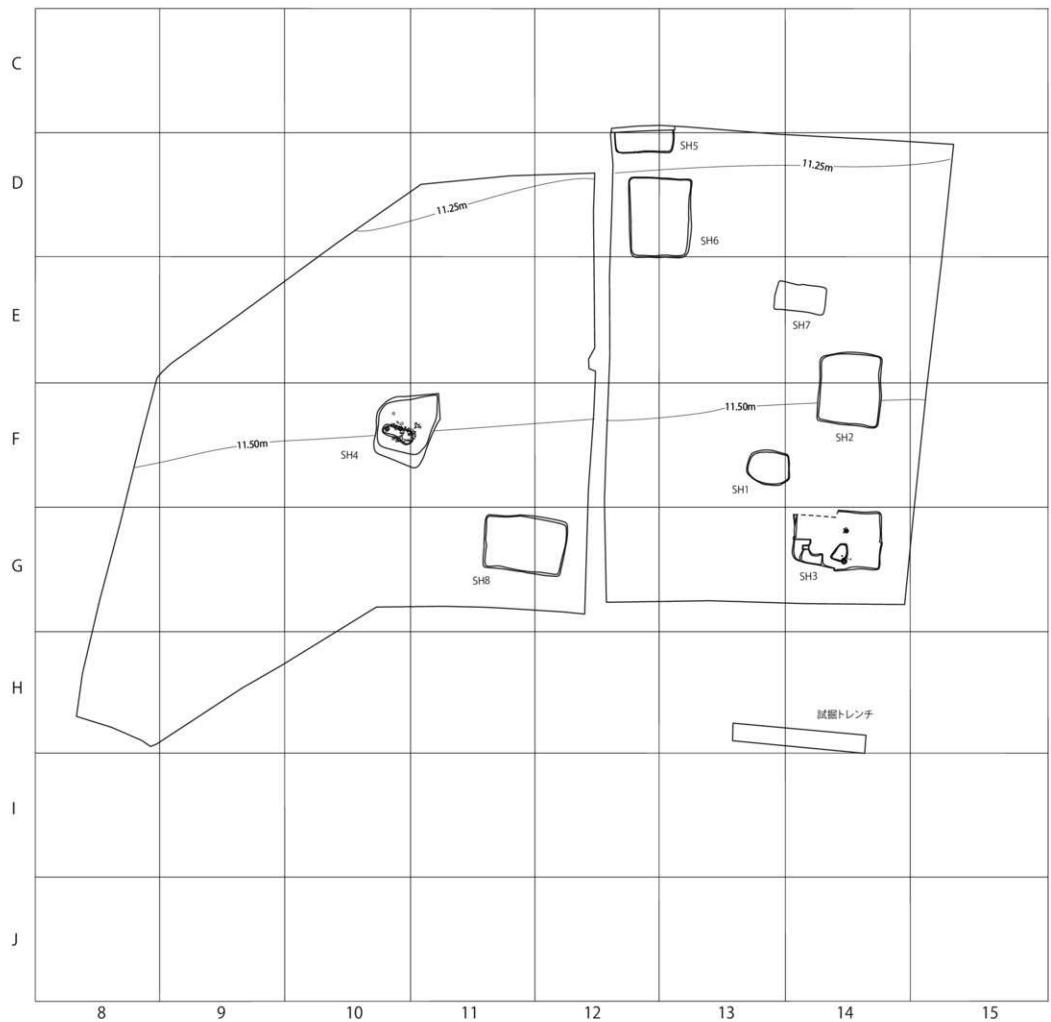
B 類 底部に突起が付く



A 類



B 類



第16図 下郡山遺跡遺構分布図

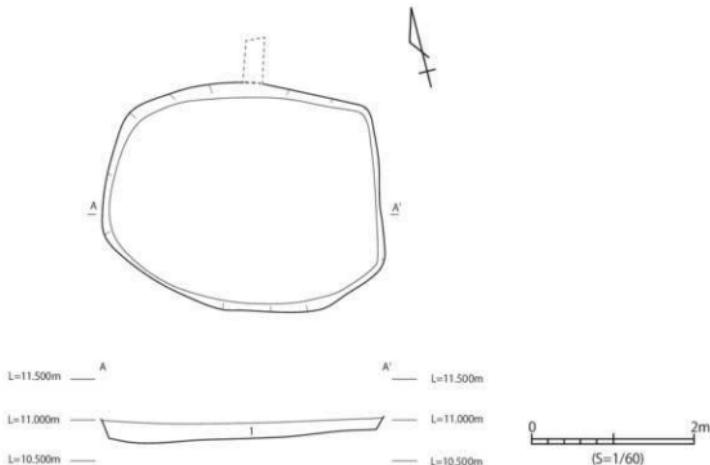
## 2. 遺構

### (1) 1号竪穴状遺構（第17図）

約3.4×2.8mの不整形な開丸方形を呈する。

平成12年の確認調査時にトレンチコーナー部にプランの隅丸部分が確認されたため、住居跡と推定されたものである。平成23年度に実施した確認調査において、当時のトレンチを拡張しプランの全容把握に努めた。土器小片が多数出土したもののプランの形態は不明瞭であり、この時点ではプランを半裁し土層堆積状況を観察した後に、シラスで埋戻しを行っている。

本調査においては、トレンチを再掘し、プランの形状を把握することから調査を開始した。この時点ではプランの正確な形状把握ができなかったため北東部にトレンチを拡張し、形状を検出した後に、T字状にセクションベルトを設定し、その後平面プランで確認した。黒褐色砂質土（10YR2/2）の落ち込みを徐々に精査して掘り下げた。検出面から約30cmで地山疊層に達した。検出の結果、柱穴・土坑等の遺構は確認出来なかった。またセクションによる土層断面の観察結果では1層（10YR2/2 黒褐色砂質土）で礫（φ3～10cm）が西側部分に多く集中し、他に土器片を含んでいる。



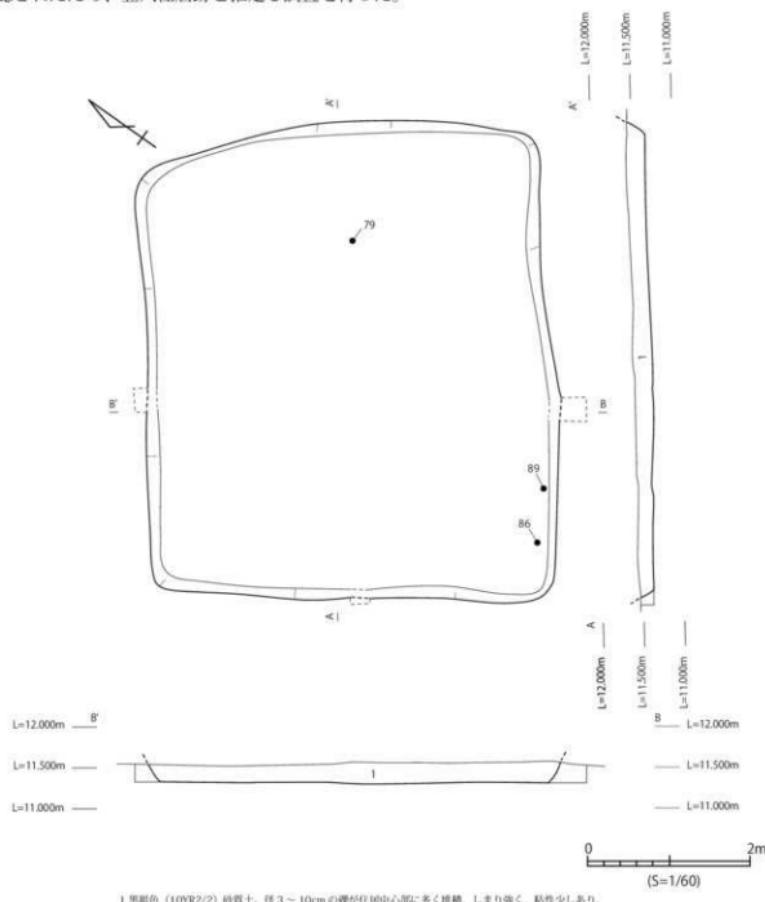
I 喀褐色（10YR3/3）砂質土。下部にφ2～10cm前後の礫を多く含む。φ0.3～0.5mmの砂粒、アカホヤ・炭化物を若干含む。粘性弱く、しまりやや密。

第17図 1号竪穴状遺構実測図

(2) 2号竪穴状遺構(第18~20図)

隅丸長方形プランを呈し、南北5.8×東西5.1mの規模で長軸はN42°Eを指す。

土器集中部分が認められ、これを中心に東西・南北にセクションベルトを設定し精査した。設定したセクションベルトの断面を観察した結果、遺構の外形の立上り部分が東西・南北の4箇所で明瞭に確認されたため、竪穴住居跡と推定し調査を行った。



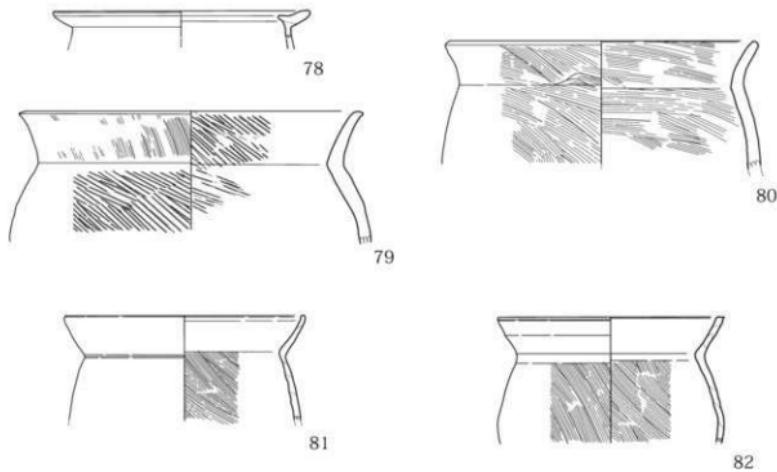
第18図 2号竪穴状遺構実測図

埋土は黒褐色砂質土（10YR2/2）で中央部分に礫・土器片が集中していた。検出面から約30cmの深さで地山礫層に達し、明確な床面は確認されなかった。柱穴・土坑等の検出を行い、柱穴と推定した4箇所をさらに精査し、半裁及び断面観察を実施したが、落ち込みが明瞭でなく柱穴とは断定できなかった。

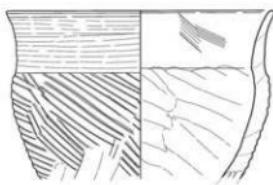
#### 出土遺物（第19・20図）

比較的多数の土器が出土したが、その大多数は埋土からの出土であり、床面からの出土は無かった。出土土器は甕・壺・高環があり、このうち甕の出土が大多数を占める。出土土器は破碎資料のみであり、接合・復元を試みたが、完形まで復元できた資料は無い。このうち78は甕A類、79～82は甕B類、83～85は甕C類に該当する。86は甕②類底部である。87は壺B類に該当する。93は叩石であり、使用痕が観察できる。

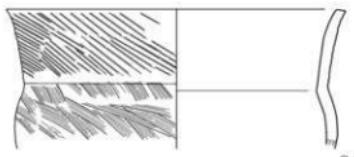
甕の口縁部による分類を踏まえると、複数時期の土器型式が混在していることが分かる。また他の竪穴状遺構ではあまり見られないタタキ調整が施された甕が比較的多く出土している。



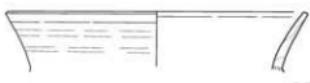
第19図 2号竪穴状遺構出土土器実測図



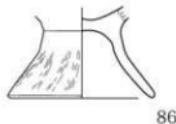
83



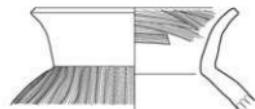
84



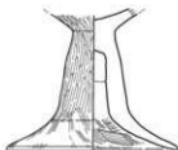
85



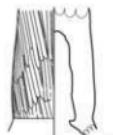
86



87



88



89



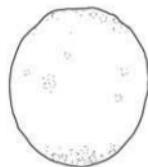
90



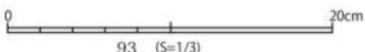
91



92



93



93 (S=1/3)

第20図 2号竪穴状遺構出土土器・石器実測図

### (3) 3号竪穴状遺構（第21～23図）

隅丸長方形プランを呈し、東西5.1×南北7.4m、長軸N50°Wを指す。SH1が検出されたトレンチにより北部が消失している。

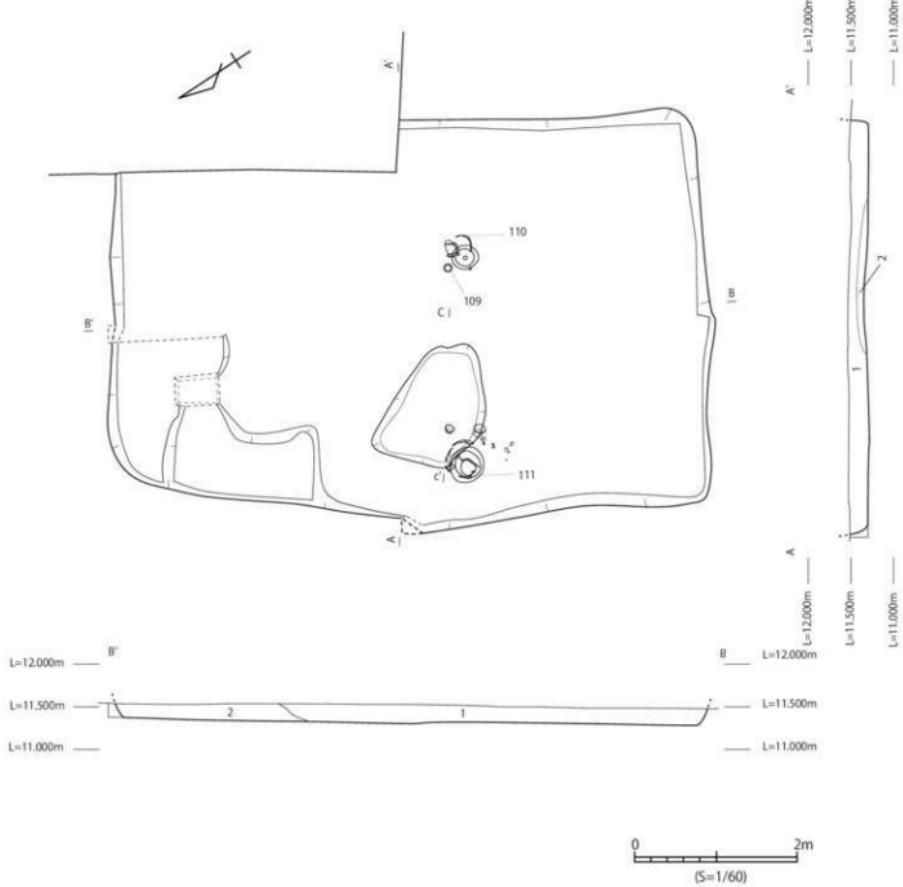
遺構検出作業時に遺物の集中が確認され、何らかの遺構があることが推測されたが、地山と遺構埋土の土色の違いが明瞭ではないため、プランの検出に至らなかった。SH1が検出されたトレンチの南壁土層精査中に、新たなプランの立ち上がりが確認され、これを元にプランの形態を推測し、東西・南北にセクションベルトを設定し精査した。結果として、遺構の範囲はセクションベルトの土層断面で明瞭に観察できたため、竪穴住居跡として調査を行った。

プランは黒褐色砂質土（10YR2/2）で覆われ、埋土中から遺物が多数出土したが、接合作業を実施した結果では完形近くまで復元できなかった。プランの床面は確認できなかったが、中央部に地床炉が確認された。地床炉は長軸1.4m短軸1.0mの不整形の楕円形を呈し、深さは約0.1mであった。炉の縁には炭化物が付着し、埋土は赤褐色の焼土であった。炉の周縁には甌と鉢が出土した。これらの土器は、床面をやや掘り込んだ状態で出土した。この地床炉が検出されたレベルで、柱穴の検出を実施したが確認することはできなかった。

#### 出土遺物（第22・23図）

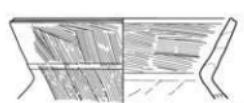
比較的多数の土器がまとめて出土した。他の住居跡の例に漏れず、明確に床面からの出土と考えられるものは110と111のみである。出土土器は甌・壺・高环・帯であり、この内、甌の出土が大半を占める。出土土器は破片資料のみであり、接合・復元を試みたが、完形まで復元できた資料は無い。このうち94～96は甌B類、97～99は甌C類に該当する。104は甌②類底部である。107～108は高环A類に該当する。109はA類の帯である。

110、111は埋設土器であり110が鉢、111が壺である。両者共、外面の色調は黒変している。



1 黒褐色 (10YR2/2) 砂質土。径 2 ~ 5cm の礫を若干含む。φ 0.5cm 前後のシラス・アカホヤ・炭化物粒を少量含む。しまり強く、粘性高い。  
 2 明褐色 (10YR3/4) 砂質土。径 0.5cm 前後の砂礫。シラス・アカホヤ・炭化物粒を多く含む。しまり強く、粘性少し有。住居床底面。

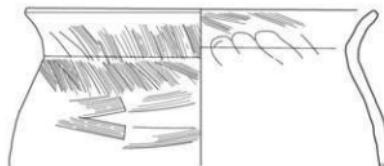
第 21 図 3号竖穴状遺構実測図



94



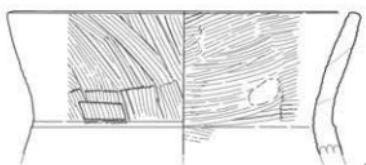
95



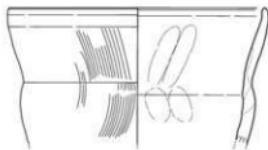
96



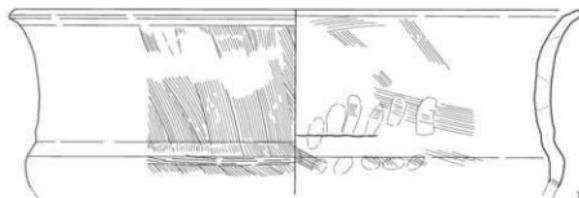
97



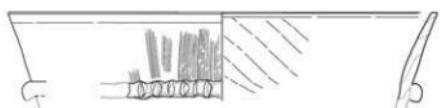
98



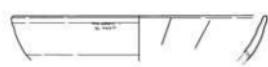
99



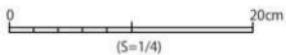
100



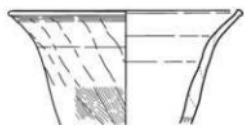
101



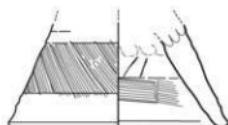
102



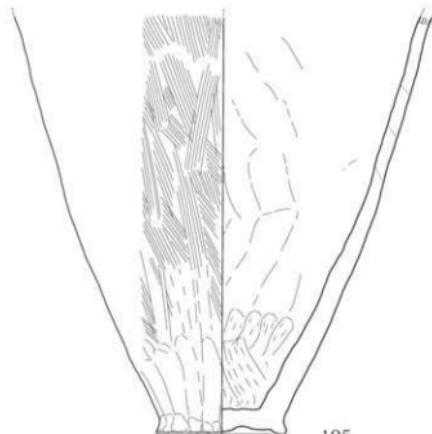
第 22 図 3 号竪穴状遺構出土土器実測図 (1)



103



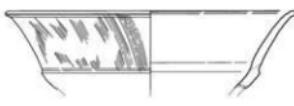
104



105



106



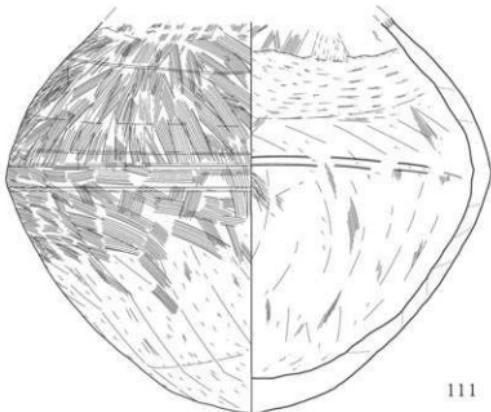
107



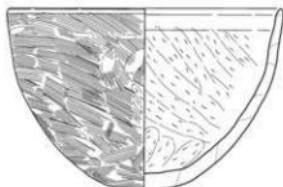
108



109



111



110

0  
(S=1/4) 20cm

第23図 3号竪穴状遺構出土土器実測図(2)

#### (4) 4号竪穴状遺構（第24～29図）

不整形の方形を呈し、中軸で東西4.4×南北5.5mの規模で長軸N31°Wを指す。これは、下郡山遺跡検出の竪穴状遺構の中でも異質なものである。

確認調査時にプランの立上りと遺物の出土が確認されていたことから、竪穴住居跡の存在が推測されていた。遺構検出面における精査では平面プランの形態を把握することは困難を極めたため、確認調査時のトレンチを拡張した上で、約5cm単位の掘下げと遺構検出作業を繰返し、約15cm掘下げた時点で礫・土器片が多く出土すると共に、平面プランを検出することができた。その後、セクションベルトを東西・南北に設定し精査・掘下げを行った。

住居跡は黒褐色砂質土で覆われ、大量の土器・礫が出土した。セクションベルトを残しつつ、これらの土器・礫を取上げていった結果、プラン中央部から石囲炉を検出した。炉の規模は、幅約1.0m・長さ2.5mで形状は歪な馬蹄形で、燃焼部はやや方形、焚口部は撥形で裾広がりであった。石組は砂岩を主体として、燃焼部の中心に径約30cm程度の人頭大の花崗岩を据えており、燃焼をかなり受けた結果、石材全体が脆くなり剥離が著しかった。炉内からは土師器が多量に出土し、炉周辺でも同様に多量の土器が出土した。炉の構築等について検証するため平面プランを実測・写真撮影の後、全体を精査して掘り下げ、石囲炉全体の形状が明確となった。

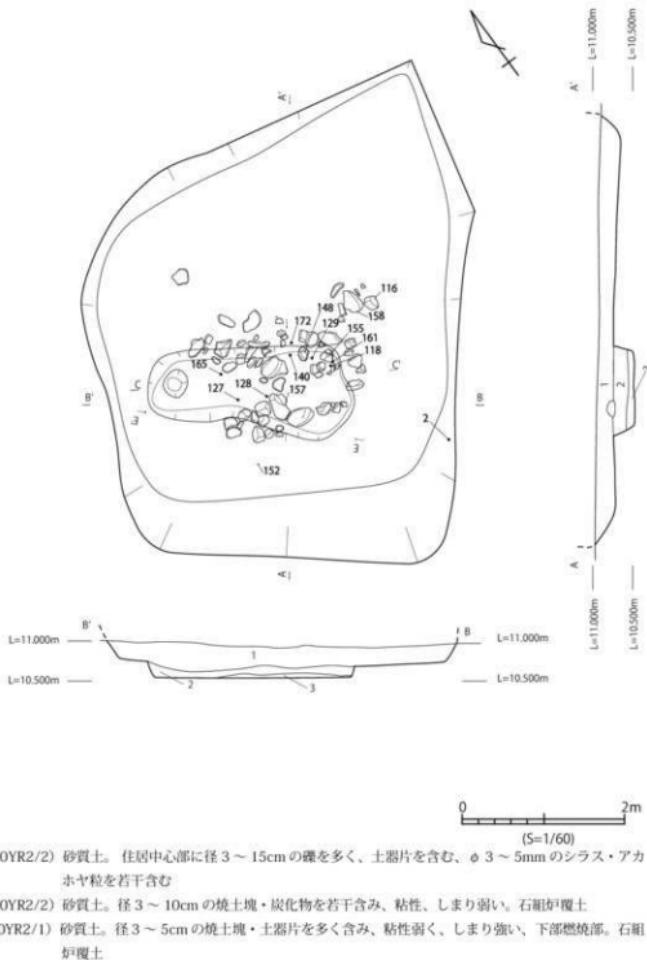
撥状に広がった焚口部では径約30cmのピット状の落込を検出した。炉を半裁し断面観察の結果、住居跡に伴う柱穴ではなく焚口施設の一部として掘られたものと考えられる。石囲炉周辺で多く出土した土器片は、今後、十分な検討は必要であるが炉構築の際に、石組の間を補填するための材料として利用した可能性が考えられる。また燃焼部北側に付設した石組は煙出し等に利用したと考えられるが一考を要する。この石囲炉の用途としては、共同で利用するための施設と考えて大過ないと思われるが、類例も少ないとから可能性の一つとして留めておきたい。

SH4のプランはかなり不整形な方形で柱穴・土坑等も検出されず、仮に住居跡としても住居内で火を使用すればかなりの被熱があり炎上の可能性が高いものと思われる。この点を踏まえると、一般的な住居跡でなく風通しの良い覆屋状の建物の可能性が強い。

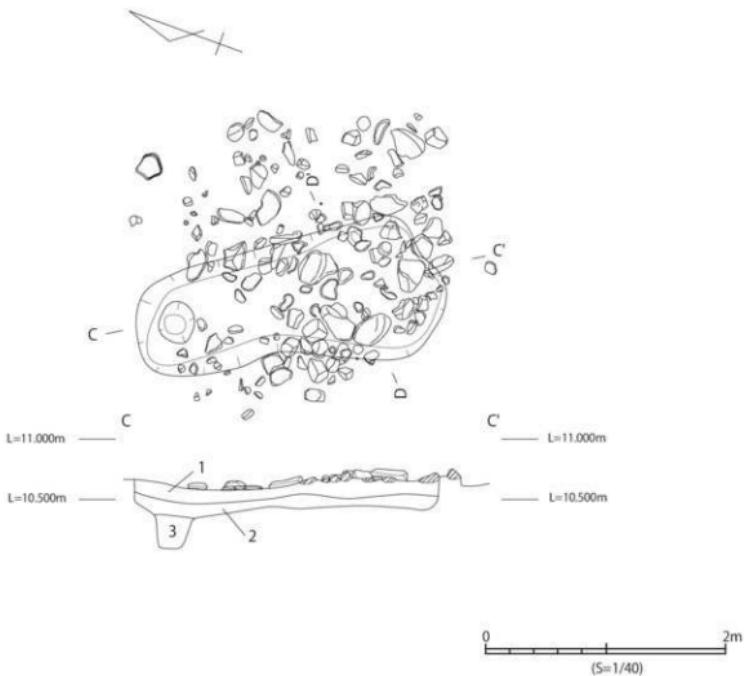
#### 出土遺物（第26～29図）

下郡山遺跡において、最多の遺物出土が確認された遺構が4号竪穴状遺構である。炉もしくはその周辺からも多数の土器が出土したが、完形まで復元することは叶わなかった。出土土器は甕・壺・高环・甌であり、この内、甕の出土が大半を占める。

112は甕C類、113～121は甕D類に該当する。123～128は甕①類底部、129～134は甕②類底部、135～137は甕③類底部に該当する。142～146は壺A類である。149～152は丸底の底部であり、壺の底部と推測される。153～156は高环A類である。157～163は高环の脚部である。162～163のように中実の資料が散見された。164～167は甌A類、168～170が同じくB類に該当する。

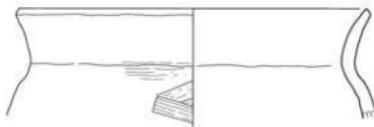


第 24 図 4号竪穴状遺構実測図



- 1 黒褐色（10YR2/2）砂質土。住居中心部に径3～15cmの礫を多く、土器片を含む、φ3～5mmのシラス・アカホヤ粒を若干含む
- 2 黒褐色（10YR2/2）砂質土。径3～10cmの焼土塊・炭化物を若干含み、粘性、しまり弱い。石組が覆土
- 3 黒色（10YR2/1）砂質土。径3～5cmの焼土塊・土器片を多く含み、粘性弱く、しまり強い。下部燃焼部。石組が覆土

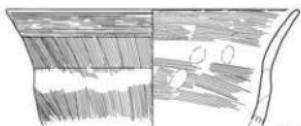
第25図 4号竖穴状遺構石窯実測図



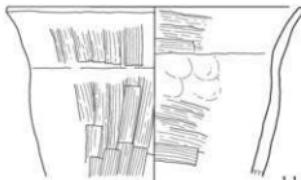
112



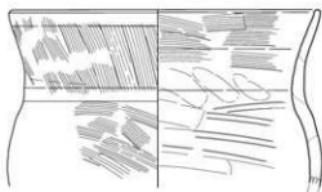
113



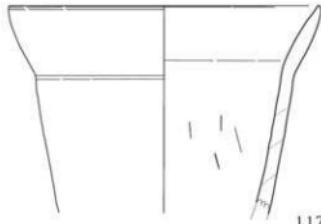
114



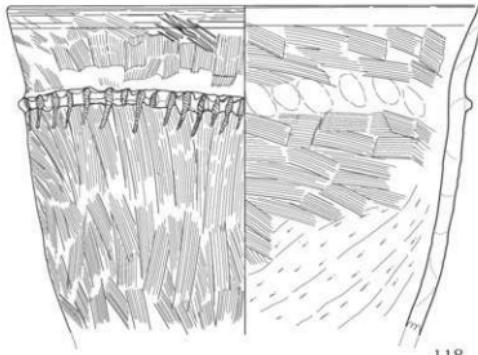
115



116



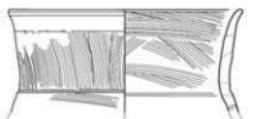
117



118



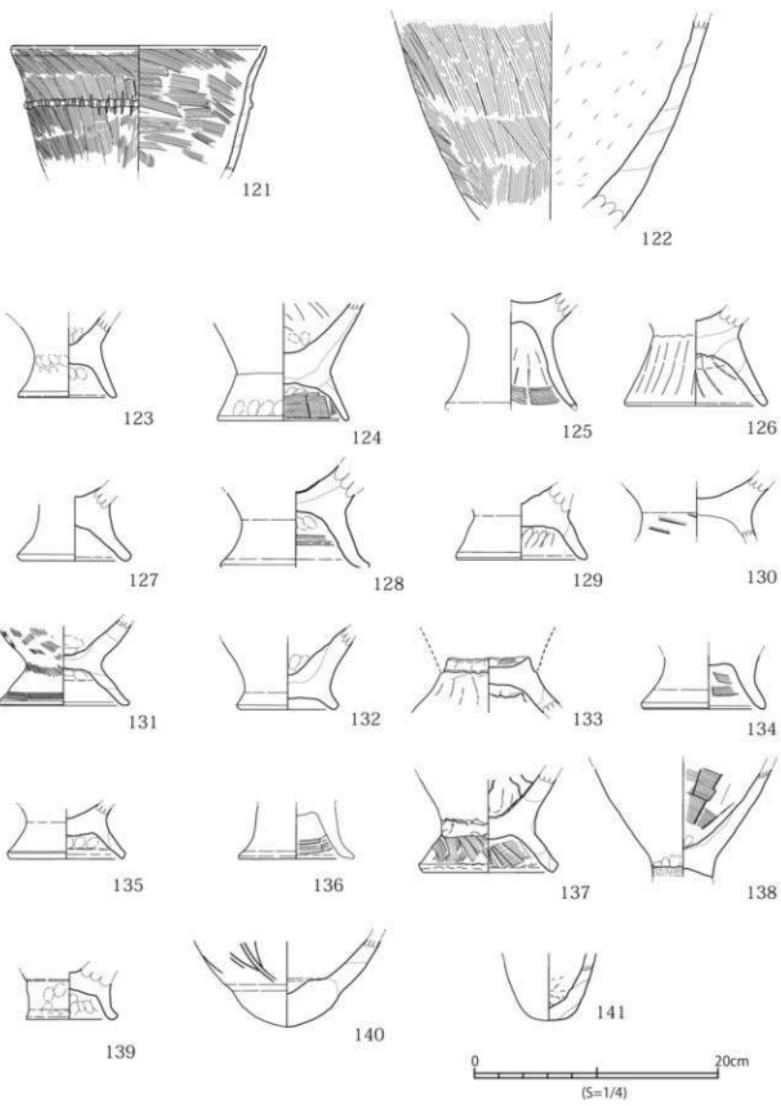
119



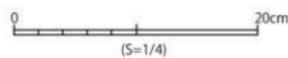
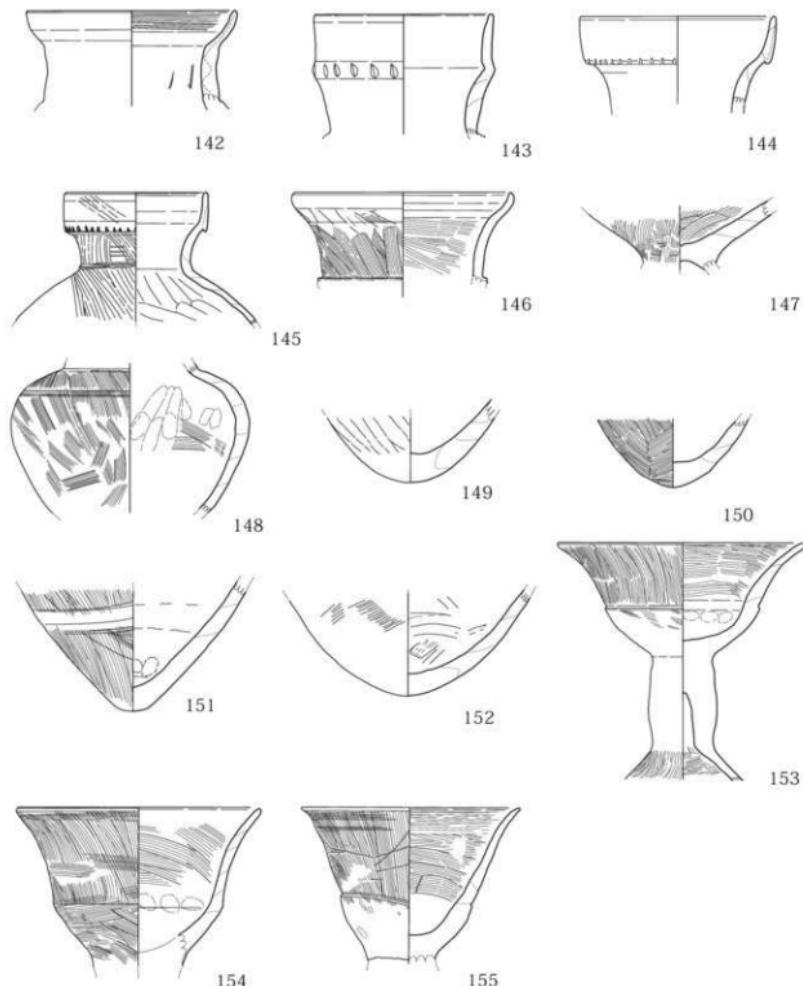
120

0 20cm  
(S=1/4)

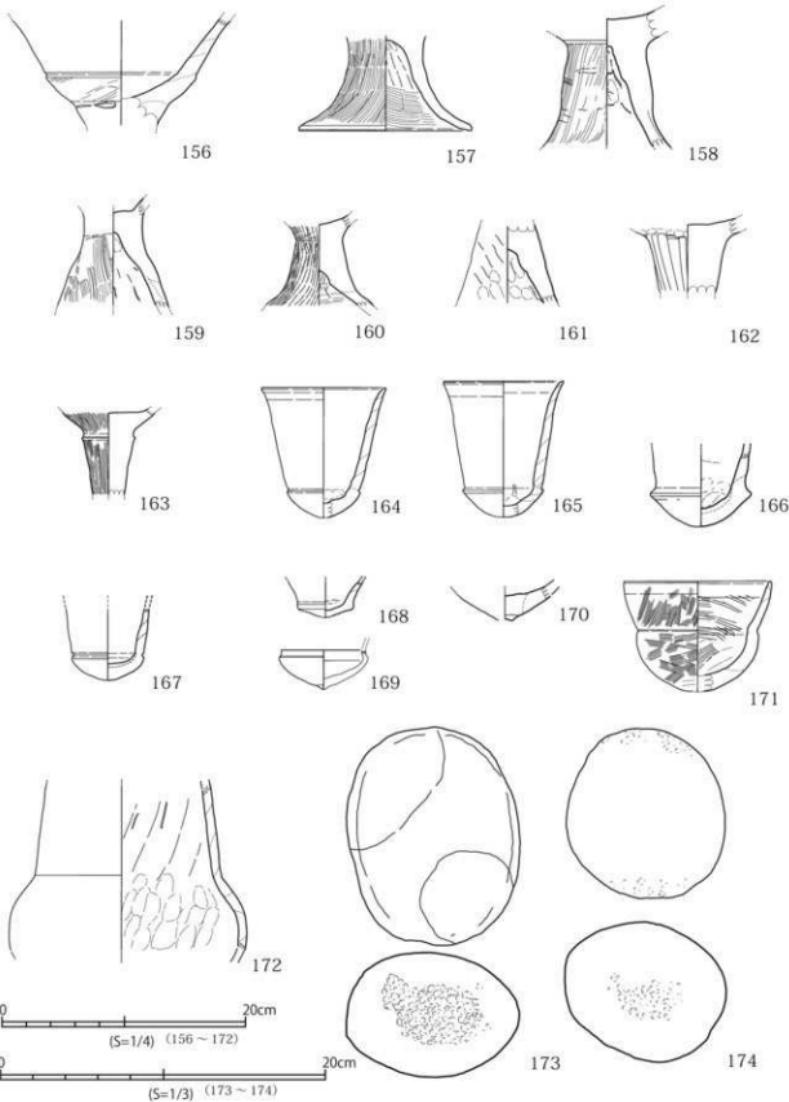
第 26 図 4 号竪穴状遺構出土土器実測図 (1)



第 27 図 4号竖穴状墓出土土器実測図 (2)



第28図 4号竖穴状遺構出土土器実測図(3)

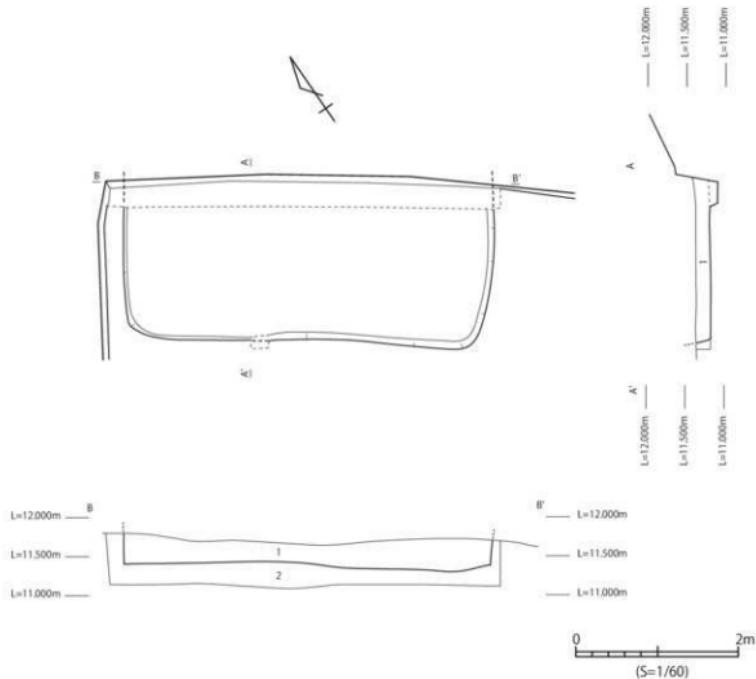


第29図 4号竪穴状遺構出土土器・石器実測図

(5) 5号竪穴状遺構 (第30図)

方形プランを呈するが、竪穴状遺構の約2/3程度は段丘の縁辺部に延びるものと推測される。残存で長軸4.8m短軸2.1mを測る。

遺構検出作業中に遺物の集中が見られたため、北側壁面に東西方向のサブトレーニングを設定し、プランの存在を確認した。結果としてプラン壁面が立上ることが確認されたため、竪穴住居跡とし調査を行った。覆土は黒褐色砂質土(10YR2/2)で繩文土器・土師器片が混在する様相を呈した。床面からは遺物の出土が無く明確な時期判定の裏付けに欠ける。また、竪穴状遺構に伴う柱穴、土坑等は確認されなかった。



1 黒褐色(10YR3/2)砂質土。φ3~5cmの礫を若干含む、しまり弱い、粘性弱い。

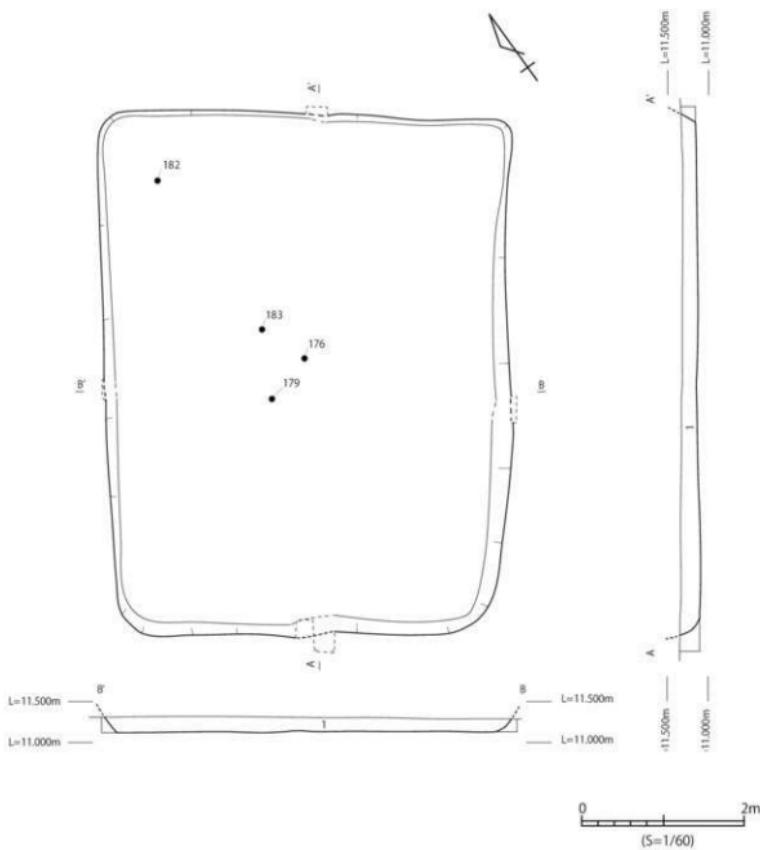
2 黒褐色(10YR2/2)砂質土。φ0.5~1cmの砂礫を少量含む、しまりやや強く、粘性少し有り。

第30図 5号竪穴状遺構実測図

(6) 6号竪穴状遺構（第31～33図）

隅丸長方形を呈し、南北 6.4 × 東西 5.0 m の規模で、長軸は N40° E を指す。

この地点は遺物が集中しており、周辺の土の色が違うことから、この中心部分を起点に東西・南北にセクションベルトを設定し、プランの範囲と立上がりの確認を行った。結果として、東西・南北と



1 黒褐色 (10YR2/3) 砂質土。住居中心部に径 2 ~ 5 cm 前後の礫を多く含む。径 0.5 ~ 1 cm のシラス・アカホヤ粒を少量含む、しまりやや強く、粘性少し有。

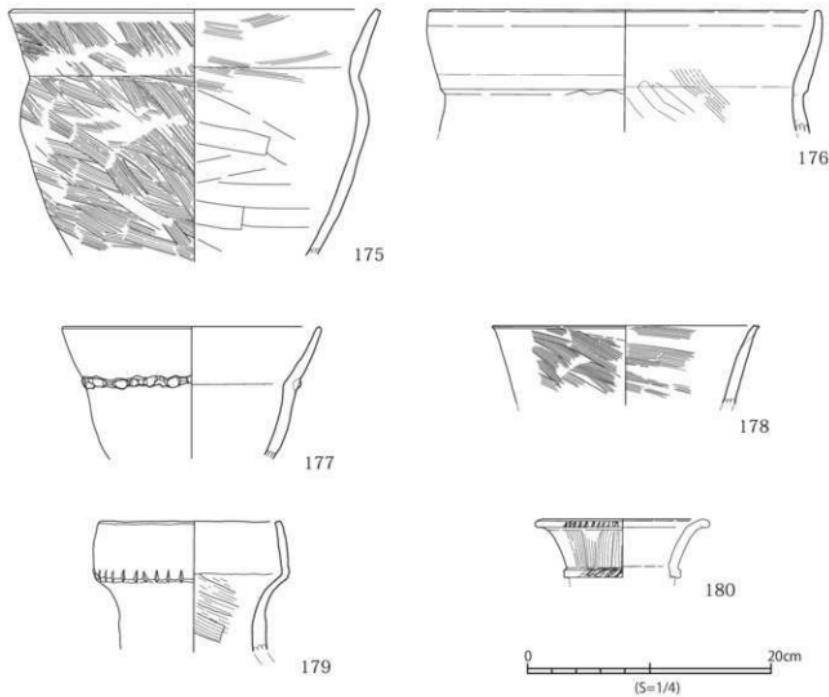
第31図 6号竪穴状遺構実測図

も各セクションで壁面の立上がりが確認できたため、竪穴住居跡と推測された。埋土は暗褐色砂土(10YR3/4)で覆われ中央部分に礫・土器片が集中していた。検出面から約30cm前後で地山礫層に達したが、明確な貼床は確認できなかった。プラン内において柱穴の検出作業を実施したが、明確な柱穴は確認できなかった。

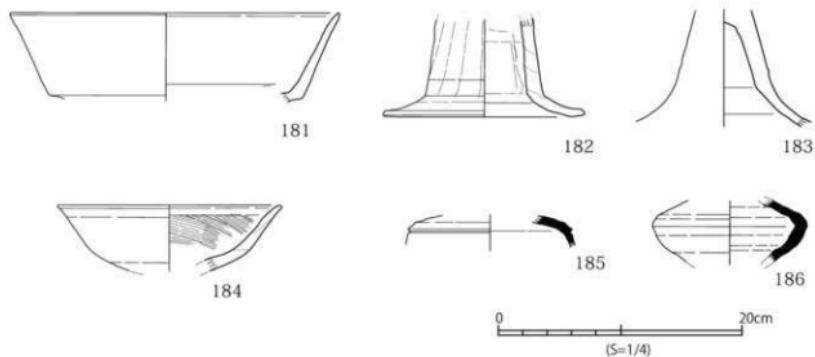
#### 出土遺物（第32・33図）

出土土器の大多数は埋土からの出土であり、床面からの出土は179に限られる。出土土器は甕・壺・高坏・塊であり、このうち甕の出土が大多数を占める。また、185、186のように須恵器が出土している。出土土器は破碎資料のみであり、接合・復元を試みたが、完形まで復元できた資料は無い。このうち175は甕C類、176～177は甕D類に該当する。179は壺A類、180は壺B類に該当する。181は高坏C類、182～183は高坏の脚部である。184は塊、185は坏蓋、186は小型壺である。

甕の口縁部による分類を踏まえると、複数時期の土器型式が混在していることが分かる。



第32図 6号竪穴状遺構出土土器実測図(1)

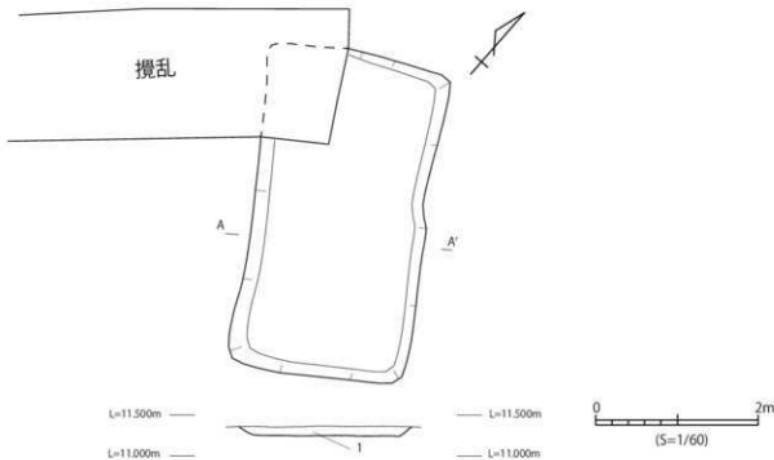


第33図 6号竪穴状遺構出土土器実測図（2）

(7) 7号竪穴状遺構（第34図）

東西2.1×南北4.0mの方形プランを呈する。

削平された部分が多く全体の約1/6は攪乱を受けている。方形状のプランで黒褐色砂質土の広がりが見られたため、東西・南北にセクションベルトを設定し精査した。その結果、深さ約10cmで地山層に達した。出土遺物も無く、形態や規模から、住居跡と認めるには疑問が残るが、土坑等の遺構が考えられる。



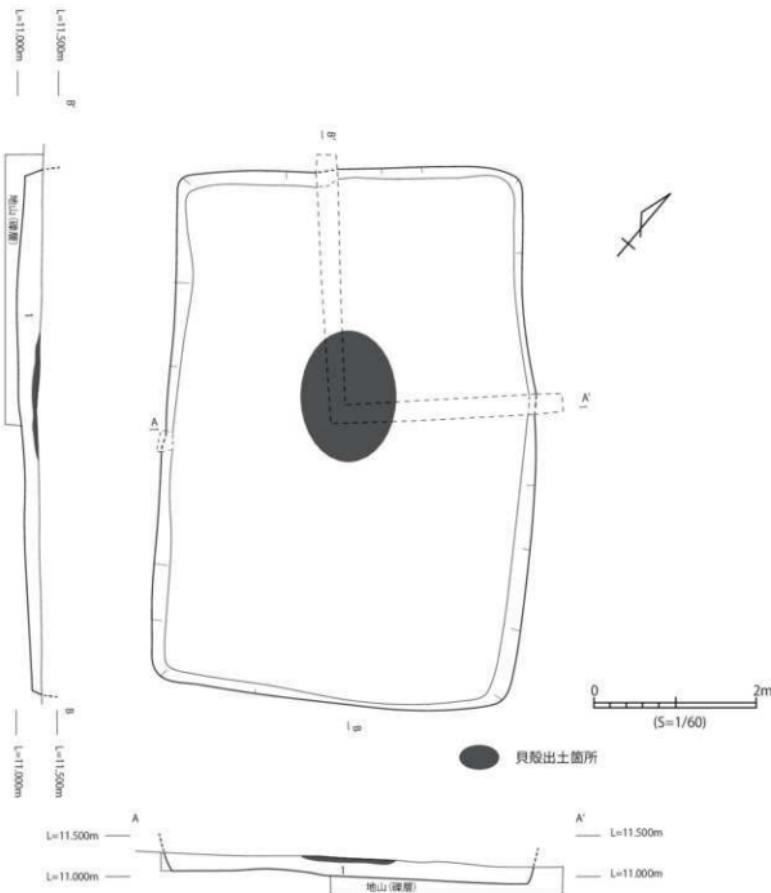
I 黒褐色（10YR2/3）砂質土。中心部に径2～5cm前後の礫を多く含む、径0.5～1cmのシラス・アカホヤ粒を少量含む、しまりやや強く、粘性少し有。

第34図 7号竪穴状遺構実測図

(8) 8号竪穴状遺構 (第35・36図)

東西4.5×南北6.1mの隅丸長方形プランを呈する。長軸はN50°Wである。

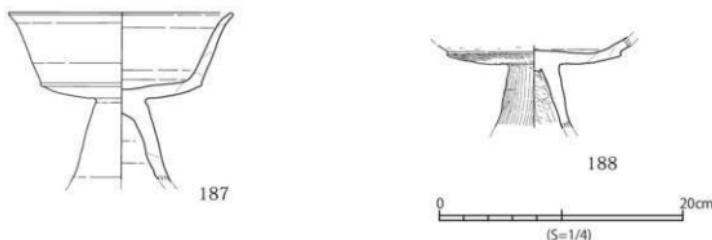
検出した平面プランは黒褐色砂質土(10YR2/2)で覆われ中央部に礫・土器・貝殻が集中していた。特に貝殻片が集中する部分では黒色砂質土(10YR2/1)で土坑状の落込みがあった。その点を踏まえ



1 黒色(10YR2/2)砂質土。径3~10cmの礫を多く含む、径0.5~1cmのアカホヤ・シラス粒を若干含む、しまりやや強く、粘性弱い

第35図 8号竪穴状遺構実測図

東西・南北にセクションベルトを設定し調査を行った。検出面から約30cm前後掘り下げると地山礫層に達し、明確な床面は検出できなかった。セクションベルトの土層観察の結果土坑状に見えた貝殻が多く堆積した部分は住居跡覆土と考えられる。この脈略に立てば住居廃絶後の埋没過程において形成された、中央部の窪地に貝殻を集中的に廃棄したもので、土坑を構築して投入されたものではないと考えられる。

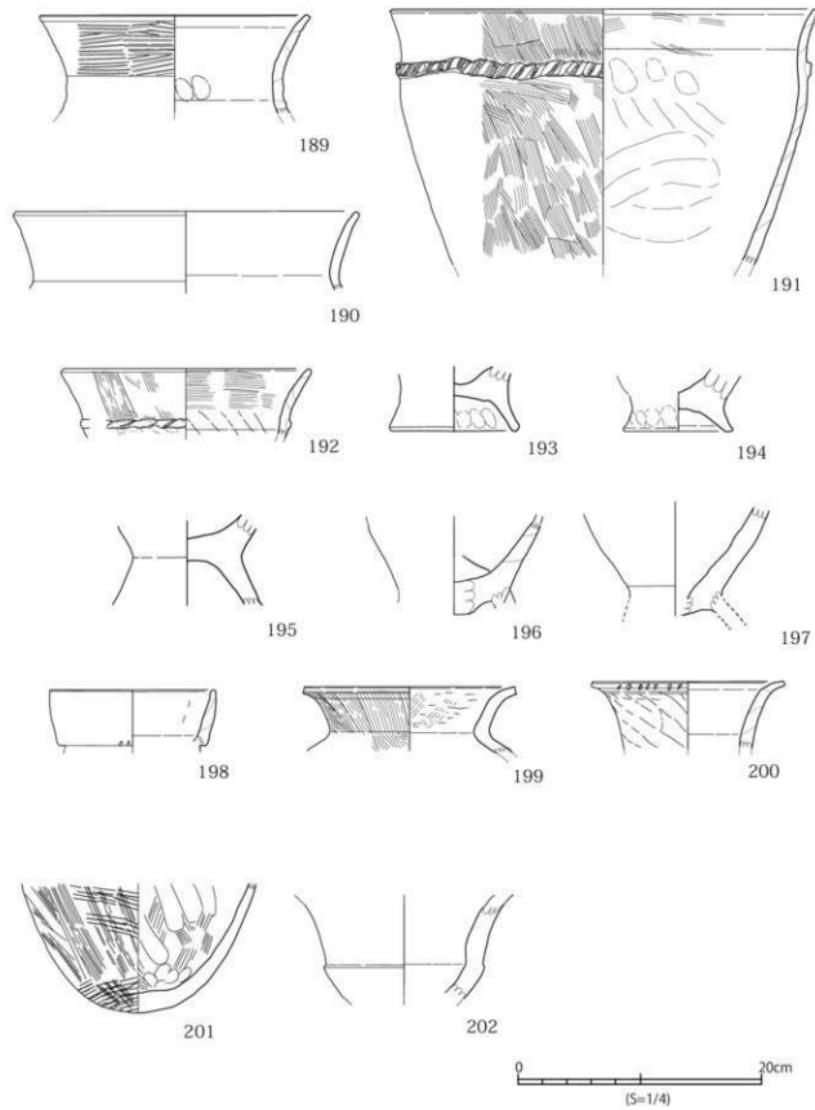


第36図 8号竪穴状遺構出土土器実測図

### 3. 包含層出土の遺物（第37・38図）

下郡山遺跡は包含層中からも古墳時代以降の遺物が出土している。その数量は遺構から出土した数量に比べれば微々たるものであるが、本項で報告する。

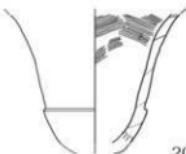
189～192は甕の口縁部である。189は口縁部にタタキ調整、胴部はナデ調整が施される。191～192は頸部に突帯を貼付けている。193～197は甕の底部である。198～200は甕の口縁部である。198がA類、199がC類に該当する。201は甕の底部であり、丸底を呈している。202は高環の坏部でB類に該当する。203は高環の脚部である。204～205は坩である。206は甕の取手部分である。甕の出土は甕の存在が示唆されるが、当遺跡においては甕を有する遺構は検出されなかった。



第37図 弥生時代～古墳時代土器実測図



203



204



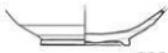
205



206



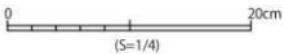
207



208



209



第38図 古墳時代～中世の遺物実測図

表4 下郡山遺跡土器觀察表（1）

辨認番号	遺物番号	種類	形状	出土場所	測量 (cm)		説明	測量	内面	外見	参考
					上幅	下幅					
14	34	穿孔	圓形	1070 番	—	—	楕円	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔、無
	35	穿孔	口縁部	系土	—	—	口幅→2 条の浅刻溝	口内	褐色	褐色	801-1-1 複数孔、無
	36	穿孔	口縁部	9401 A	—	—	口幅	口内	褐色	褐色	801-1-1 複数孔、無
	37	穿孔	口縁部	9401 D	—	—	口幅→加彎曲	口内	褐色	褐色	801-1-1 複数孔、無
	38	穿孔	口縁部	1 個	—	—	口幅	口内	褐色	褐色	801-1-1 複数孔
	39	穿孔	口縁部	9404 008	(110)	—	口幅→2 条の浅刻溝	口内	褐色	褐色	801-1-1 複数孔、無
	40	穿孔	系土	—	—	—	口幅→浅刻溝	口内	褐色	褐色	801-1-1 複数孔
	41	穿孔	系土	—	—	—	口幅→加彎曲	口内	褐色	褐色	801-1-1 複数孔
15	42	穿孔	系土	—	—	—	口幅→浅刻溝	口内	褐色	褐色	801-1-1 複数孔
	43	穿孔	系土	5401 番	—	—	口幅→浅刻溝	口内	褐色	褐色	801-1-1 複数孔
	44	穿孔	系土	—	—	—	口幅→浅刻溝	口内	褐色	褐色	801-1-1 複数孔
	45	穿孔	系土	1 個	—	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔、無
	46	穿孔	口縁部	9401 No.15	(24.6)	—	ナガ×ホリカナ→ナダ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔、無
	47	穿孔	口縁部	9402 A	(23.6)	—	ナガ	ハサ	にじく一色	にじく一色	801-1-1 複数孔、無
	48	穿孔	口縁部	9402 D	(21.3)	—	丸化著しい	ナガ→ナダ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	49	穿孔	口縁部	9403 D	(15.8)	—	ナガ→ナダ	ナガ→ナダ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
16	50	穿孔	口縁部	9402 A-E	(21.1)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	51	穿孔	口縁部	9402 A-F	(25.2)	—	ナガ×ホリカナ→ナダ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔、無
	52	穿孔	口縁部	9402 G-H	(24.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	53	穿孔	口縁部	9402 J	(16.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	54	穿孔	口縁部	9402 K	(13.2)	—	口幅	ナガ→ナダ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	55	穿孔	口縁部	9402 L	(12.2)	—	口幅	ナガ→ナダ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	56	穿孔	口縁部	9402 M	(11.8)	—	口幅	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	57	穿孔	口縁部	9402 N	(11.4)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
20	58	穿孔	口縁部	9402 P	(10.8)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	59	穿孔	口縁部	9402 Q	(10.4)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	60	穿孔	口縁部	9402 R	(10.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	61	穿孔	口縁部	9402 S	(9.6)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	62	穿孔	口縁部	9402 T	(9.2)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	63	穿孔	口縁部	9402 U	(8.8)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	64	穿孔	口縁部	9402 V	(8.4)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	65	穿孔	口縁部	9402 W	(8.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
21	66	穿孔	口縁部	9403 A	(16.3)	—	ナガ→ナダ	ナガ→ナダ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	67	穿孔	口縁部	9403 B	(14.8)	—	ナガ×ホリカナ→口縫合部	コナダ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔、無
	68	穿孔	口縁部	9403 C	(10.7)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	69	穿孔	口縁部	9403 D	(10.8)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	70	穿孔	口縁部	9403 E	(10.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	71	穿孔	口縁部	9403 F	(9.6)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	72	穿孔	口縁部	9403 G	(9.2)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	73	穿孔	口縁部	9403 H	(8.8)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
22	74	穿孔	口縁部	9403 I	(8.4)	—	ナガ→ナダ	ナガ→ナダ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	75	穿孔	口縁部	9403 J	(8.0)	—	ナガ→ナダ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	76	穿孔	口縁部	9403 K	(7.6)	—	ナガ→ナダ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	77	穿孔	口縁部	9403 L	(7.2)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	78	穿孔	口縁部	9403 M	(7.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	79	穿孔	口縁部	9403 N	(6.6)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	80	穿孔	口縁部	9403 O	(6.2)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	81	穿孔	口縁部	9403 P	(5.8)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
23	82	穿孔	口縁部	9403 Q	(5.4)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	83	穿孔	口縁部	9403 R	(5.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	84	穿孔	口縁部	9403 S	(4.6)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	85	穿孔	口縁部	9403 T	(4.2)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	86	穿孔	口縁部	9403 U	(3.8)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	87	穿孔	口縁部	9403 V	(3.4)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	88	穿孔	口縁部	9403 W	(3.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	89	穿孔	口縁部	9403 X	(2.6)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
24	90	穿孔	口縁部	9403 Y	(2.2)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	91	穿孔	口縁部	9403 Z	(1.8)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	92	穿孔	口縁部	9403 AA	(1.4)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	93	穿孔	口縁部	9403 BB	(1.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	94	穿孔	口縁部	9403 CC	(0.6)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	95	穿孔	口縁部	9403 DD	(0.2)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	96	穿孔	口縁部	9403 EE	(0.1)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	97	穿孔	口縁部	9403 FF	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
25	98	穿孔	口縁部	9403 GG	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	99	穿孔	口縁部	9403 HH	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	100	穿孔	口縁部	9403 II	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	101	穿孔	口縁部	9403 JJ	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	102	穿孔	口縁部	9403 KK	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	103	穿孔	口縁部	9403 LL	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	104	穿孔	口縁部	9403 MM	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	105	穿孔	口縁部	9403 NN	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
26	106	穿孔	口縁部	9403 OO	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	107	穿孔	口縁部	9403 PP	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	108	穿孔	口縁部	9403 QQ	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	109	穿孔	口縁部	9403 RR	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	110	穿孔	口縁部	9403 SS	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	111	穿孔	口縁部	9403 TT	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	112	穿孔	口縁部	9403 AA	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔
	113	穿孔	口縁部	9403 BB	(0.0)	—	ナガ	ナガ	にじく複数孔	にじく複数孔	801-1-1 複数孔

表5 下郡山遺跡土器観察表(2)

遺物番号	遺物名	種別	部品	出土場所	形態 (cm)	測量		測量		測量	測量	備考	
						上部	直径	底部	外周	内径	外周	内径	
26	盤	口縁一側底	S404-D区	(23.0)	—	—	—	—	圓方内17→ナド	褐色	褐色	2011-1-150008, ■	
	盤	口縁一側底	S404-D底区	(24.0)	—	—	ハサ	ハサ→ナド	朱黃褐色	褐色	褐色	2011-1-150009, ■	
	盤	口縁一側底	S404-Na04	(22.6)	—	—	ハサ→ナド	ハサ→ナド	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	2011-1-150010, ■	
	盤	口縁一側底	S404-D底	(25.4)	—	—	ナド	ナド	—	—	—	2011-1-150011, ■	
	盤	口縁一側底	S404-Na05	(28.7)	—	—	ハサ→ナド→輪底茎突	ハサ→ナド	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	2011-1-150012, ■	
	盤	口縁一側底	S404-D底区	(21.6)	—	—	圓方内17→口縁茎突	圓方内17	褐色	褐色	褐色	2011-1-150013, ■	
27	盤	口縁一側底	S404-Na08	(19.8)	—	—	ハサ→ナド	ハサ→ナド	—	—	—	—	2011-1-150014, ■
	盤	口縁一側底	S404-N	(26.7)	—	—	ハサ→側面茎突	ハサ	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	2011-1-150015, ■
	盤	底面	S404-N	—	—	—	ハサ	ナド	—	—	—	—	2011-1-150016, ■
	盤	底面	S404-D区	—	7.8	—	ナド	ナド	—	—	—	—	2011-1-150017, ■
	盤	底面	S404-D上層	—	(11.5)	—	ナド	ナド	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	2011-1-150018, ■
	盤	底面	S404-D区	—	—	—	ナド	ナド→ナド	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	2011-1-150019, ■
	盤	底面	S404-D上層	—	(10.5)	—	ナド	ナド	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	2011-1-150020, ■
	円筒管	底面	S404-Na074	—	(8.0)	—	ナド	ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150021, ■
	盤	底面	S404-Na071	—	(10.5)	—	ナド	ナド	圓方内17	江戸・地色	江戸・地色	江戸・地色	2011-1-150022, ■
	盤	底面	S404-Na0371 ■	—	(10.0)	—	ナド	ナド	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	江戸・黄褐色	2011-1-150023, ■
	円筒管	底面	S404-Na071	—	—	—	ハサ→ナド	ナド	—	—	—	—	2011-1-150024, ■
	盤	底面	S404-N区	—	(10.0)	—	ハサ→ナド	ナド	江戸・地色	江戸・地色	江戸・地色	江戸・地色	2011-1-150025, ■
	円筒管	底面	S404-N	(7.0)	—	—	ナド	ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150026, ■
	盤	底面	S404-D上層	—	—	—	ナド	ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150027, ■
	盤	底面	S404-Na035	—	9.5	—	ナド→ナド	ナド→ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150028, ■
	盤	底面	S404-D区	—	(9.0)	—	ナド	ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150029, ■
	盤	底面	S404-D上層	—	(8.0)	—	ナド	ナド→ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150030, ■
	盤	底面	S404-D	—	(10.0)	—	ナド	ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150031, ■
	盤	底面	S404-Na0351 ■	—	(10.0)	—	ナド	ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150032, ■
28	盤	底面	S404-A区	—	—	—	ハサ?	—	圓方内17	江戸・地色	江戸・地色	江戸・地色	2011-1-150033, ■
	盤	底面	S404-D上層	—	6.9	—	ナド	ナド	江戸・地色	江戸・地色	江戸・地色	江戸・地色	2011-1-150034, ■
	盤	底面	S404-Na027	—	—	—	ハサナド	ナド	—	—	—	—	2011-1-150035, ■
	盤	底面	S404-Na035	—	(4.0)	—	ナド	ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150036, ■
	円筒管	底面	S404-B	(10.0)	—	—	ハサ→ナド	ナド	—	—	—	—	2011-1-150037, ■
	盤	底面	S404-B	(11.0)	—	—	ハサ→ナド	ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150038, ■
	円筒管	底面	S404-B	(16.0)	—	—	ナド	ナド	—	—	—	—	2011-1-150039, ■
	盤	底面	S404-B	(14.0)	—	—	ハサ→ナド	ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150040, ■
	円筒管	底面	S404-B	(17.0)	—	—	ハサ→ナド	ナド→ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150041, ■
	盤	底面	S404-B	(17.0)	—	—	ナド	ナド	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	江戸・輪相	2011-1-150042, ■
29	盤	底面	S404-Na181 ■	—	—	—	ナド	ナド	江戸・地色	江戸・地色	江戸・地色	江戸・地色	2011-1-150043, ■
	皿	口縁	S404-B	—	—	—	ハサ	ナド→ナド	—	—	—	—	2011-1-150044, ■
	皿	口縁	S404-B	—	—	—	ハサ	ナド→ナド	—	—	—	—	2011-1-150045, ■
	皿	口縁	S404-B	—	—	—	ハサ	ナド→ナド	—	—	—	—	2011-1-150046, ■
	皿	口縁	S404-B	—	—	—	ハサ	ナド→ナド	—	—	—	—	2011-1-150047, ■
30	皿	口縁	S404	—	—	—	ハサ	ナド→ナド	—	—	—	—	2011-1-150048, ■
	皿	口縁	S404	—	(13.0)	—	ハサ	ナド	—	—	—	—	2011-1-150049, ■

表6 下郡山遺跡土器觀察表（3）

序番番号	遺物番号	種別	部位	出土場所	測量 (cm)	器形		表面	内面	外見	内面	目次	図号
						上幅	下幅						
29.	118	遺存	縹部	SH04 No.65	—	—	—	ハコ→ナド	ナド	に凸・裏褐色	裏白色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	119	遺存	縹部	SH04 D区	—	—	—	斜下方向ハコ	ナド	褐色	褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	140	遺存	縹部	SH04 E区	—	—	—	斜下方向ハコ	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	161	遺存	縹部	SH04 No.381層	—	—	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	162	遺存	縹部	SH04 D面区	—	—	—	ヘラナド	ナド	に凸・褐色	に凸・褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	163	遺存	縹部	SH04 E面区	—	—	—	ナド	ナド	裏褐色	褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	164	塊	D隙一隙部	SH04 D上層	(10.2)	(6.0)	—	斜傾・底面へ向て側 壁力ナド→D隙部傾角ナ ド、底面傾角ナ ド	底面傾角ナド→D隙部傾角ナ ド、底面傾角ナ ド	に凸・裏褐色	明褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	165	塊	D隙一隙部	SH04 D面区	(10.0)	(6.0)	—	ハコ割りナド	底面傾角ナド、斜面へ向てナ ド	底面傾角ナド	明褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	166	塊	D隙一隙部	SH04 E面区	—	(8.7)	—	底傾・底面ナドナ ド	底面傾角ナド、底面傾角ナ ド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	167	塊	D隙一隙部	SH04 D上層	—	(5.0)	—	ヘラナド	ナド	底面傾角ナド、底面傾角ナ ド	底面傾角ナド、底面傾角ナ ド	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
32.	168	塊	底部	SH04 D区	—	(4.6)	—	ハコ→ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	169	塊	底部	SH04 E面区	—	(8.0)	—	ヘラナドナド→ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	170	遺存	井戸	SH04 A区	—	—	—	ナド→ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	171	小型灰陶片	D隙一隙部	SH04 D	(11.7)	—	8.9	ナド	ナド→ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	172	小型灰陶片	縹部	SH04 B4	—	—	—	ナド→ナド	底面ナド→ナド	底面ナド	底面ナド	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	173	塊	D隙一隙部	SH04	—	—	—	ナド	ナド→ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	176	塊	D隙一隙部	SH04 B6	(23.6)	—	—	ナド	ナド	底面ナド	明褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	177	塊	D隙一隙部	SH04 破片 (No.17)	(20.6)	—	—	ナド→底面傾斜変	ヘラナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	178	塊	D隙部	SH04 D	(20.4)	—	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	179	塊	D隙部	SH04 No.17	(11.6)	—	—	D隙部傾斜面と斜変	ナド→ナド	底面傾斜面	明褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
33.	180	塊	D隙部	SH04 C層	(33.1)	—	—	ナド→底面変形足、口	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	181	遺存	井戸	SH04 A区	(20.2)	—	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	182	遺存	縹部	SH05 C層 (No.14)	—	(16.0)	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	183	遺存	縹部	SH05 C層 (No.11)	—	—	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	184	塊	D隙一隙部	SH05 E区	(3.0)	—	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	185	塊	D隙部	SH05 C層	—	—	—	口	口	縹部	縹部	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	186	可燃物	縹部	SH05 C層	—	—	—	口	口	縹部	縹部	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
36.	187	遺存	井戸一隙部	SH0C	(18.2)	—	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	188	遺存	H一隙部	SH0A	—	—	—	口	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	189	塊	D隙一隙部	7層-15	(20.3)	—	—	縹部斜タキ、縹部カ タキ	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	190	塊	D隙部	素土	(27.0)	—	—	ナド→ナド	ナド→ナド	縹部	縹部	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	191	塊	D隙一隙部	素土	(34.4)	—	—	ナド→ナド→底面傾 斜変	ナド	縹部	縹部	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	192	塊	D隙部	素土	(20.0)	—	—	ナド→底面傾斜変	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	193	塊	縹部	セトレンセ1層	(7.9)	—	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	194	塊	縹部	セト1層	(8.0)	—	—	縹ナサエ	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	195	塊	縹部	セトレンセ素土	—	—	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	196	塊	縹部	セト1層	—	—	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
37.	197	塊	縹部	セトレンセ1層	—	—	—	ナド	ナド	縹部	縹部	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	198	塊	D隙一隙部	素土	(13.1)	—	—	ナド	ナド→ナド	に凸・褐色	に凸・褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	199	塊	D隙一隙部	素土	(18.3)	—	—	ナド	ナド→ナド	に凸・褐色	に凸・褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	200	塊	D隙部	縹部縫合リトレント	(75.2)	—	—	ナド	ナド	実褐色	実褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	201	塊	縹部	—	—	—	—	ナド→ナド→ナド	ナド→ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	
	202	遺存	井戸	SK-7層	(11.2)	—	—	ナド	ナド	に凸・裏褐色	に凸・裏褐色	目録1-1-1 遺物番号付記 地、裏面は褐色の状態 で、表面は白色の状態	

表7 下郡山遺跡土器観察表（4）

件名番号	遺物番号	種別	部材	出土場所	測量 (cm)			調査		表面		内部		測定	備考
					上部	底辺	側面	外形	内形	外形	内形	外形	内形		
38	303	高井	圓筒	SH01-125103001-1トレ	-	-	-	ナメ	ナメ	表面褐色	表面褐色	3801-125103001-1			
	304	堀	圓筒	SH01-125103001-2	-	(8.4)	-	ハゲータブ	口縁高凸ハケ、根出縁凸内ナブ	に凸・有稜角	に凸・有稜角	3801-125103001-2			
	305	舟	圓筒	一株	-	(2.2)	-	ミガキナ	ミガキナ	底面褐色	底面褐色	3801-125103001-3			
	306	瓶	圓筒	6トレンチ1層	-	-	-	ナメ	ナメ	底面褐色	底面褐色	3801-125103001-4			
	307	片	圓筒	黄泥 薄板	-	(7.3)	-	凹輪ナブ	凹輪ナブ	底面褐色	底面褐色	3801-125103001-5			
	308	堀	圓筒	表土	-	(7.3)	-	凹輪ナブ	凹輪ナブ→ヘラエコ	表面赤	表面赤	3801-125103001-6			
	309	舟	白練-信鐵	1層-底	(13.3)	-	14.2	凹輪ナブ	凹輪ナブ	底面褐色	底面褐色	3801-125103001-7			

表8 下郡山遺跡石器観察表

捕國番号	遺物番号	器種	出土地他		石材	法量				
						長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
15	65	2次調整剝片	北1	トレンチ表土	抵張一括	黒曜石	1.7	1.7	0.5	2.0
	66	2次調整剝片		表土		黒曜石	2.2	1.3	0.5	1.4
	67	2次調整剝片	北1	トレンチ表土	抵張一括	黒曜石	2.9	2.4	0.9	3.1
	68	2次調整剝片		SH06-D		黒曜石	1.9	2.2	0.7	3.6
	69	2次調整剝片		表土中	チャート	4.4	3.6	1.4	31.2	
	70	使用痕剝片		1層		黒曜石	3.4	2.5	0.9	9.8
	71	使用痕剝片		SH02-A		黒曜石	3.4	2.3	0.8	10.1
	72	使用痕剝片		1層		黒曜石	5.1	2.1	1.5	11.0
	73	使用痕剝片	10	トレンチ 1層一括		黒曜石	3.5	1.8	0.8	11.5
	74	ノミ型石斧		1層下		砂岩	4.9	1.4	0.8	10.0
	75	局部磨製石斧		1層下		ホルンフェルス	17.3	5.8	2.9	320.0
	76	打製石斧		1層下		泥岩	7.9	5.4	2.1	140.0
	77	磨製石斧		SH03		砂岩	6.6	4.7	2.9	141.0
20	93	叩石		SH02表土		砂岩	7.2	6.3	5.9	210.0
29	173	叩石		SH04左周辺		砂岩	8.8	7.0	6.1	300.0
	174	叩石		SH04右		砂岩	7.1	6.8	7.0	262.0

## 第5節 小結

本節においては、下郡山遺跡において確認された縄文時代・古墳時代の遺物・遺構について、時間的な位置付け等を記載する。

### 縄文時代

下郡山遺跡においても、川除遺跡で出土した縄文時代早期に該当する遺物が出土している。当遺跡において、まとまった遺物の出土が確認されたのは縄文時代後期後半～晩期の遺物である。土器型式としては川除遺跡と大差無い。

### 古墳時代

下郡山遺跡においては8基の竪穴状遺構が検出された。竪穴状遺構については、柱穴等は確認出来なかったが形状や規模から、竪穴住居跡として考えられるが7号は先述したとおり、竪穴住居跡とは考えにくい。本来ならば、これらから出土した遺物の時間軸をもとに、1時期あたりの集落構成を復元していくわけだが、明確に住居床面からの出土が見られない住居跡が多く、集落の復元を考察するまでに至らなかった。鹿児島県域の成川式土器の編年としては中村（1987）などがあり、遺構の帰属時期は弥生時代終末～古墳時代前期に属することとなる。いずれにせよ、出水市域の成川式土器の編年は確立されているとは言い難く、今後の検討課題の一つと言える。

住居跡の土器器種構成としては、全ての住居跡から甕が出土している。住居内のセット構成比率も甕が最も高く、以下、高杯・壺・臼が続く。

検出された竪穴住居跡の全てが方形プランである。規模が最大の住居跡がSH3、最小のものがSH4である。

遺構の構造としては、貼床が明確に確認されず、平坦なものが多かった。床面には焼土が見られる住居跡もあり、当時は地床炉が使われていたと推測され、SH3における壺の埋設状況が、当時の土器使用方法を如実に表しているものと考えられよう。

また、主柱穴が確認されなかった住居跡が多く、どのような上屋構造を持つのか不明瞭な点が多い。

本文中で、指摘したことではあるが、遺物がほとんど出土しない住居跡が存在する中で、SH4に代表されるように、遺物の大量出土が見られる住居跡が存在した。この住居跡からは、確かに複数時期の遺物が出土するものの、特定時期に該当する土器の集中的な投棄が見て取れる。また、出土土器の時期幅が微妙に異なっている点も注意が必要であろう。つまり、住居を廃絶する際に、遺物を集中的に廃棄するというシステムの下に、下郡山遺跡の集落は成り立っていた可能性がある。その結果として、遺物の出土しない住居跡が存在するに至ったと推測されよう。

通常、古墳時代の集落においては竪穴住居の他に、土坑や溝状遺構などの遺構が検出されることが多いが、今回の調査では土坑等の遺構は確認できなかった。

## 第5章 総括

これまで川除遺跡・下郡山遺跡の調査成果を報告してきた。これらの遺跡は同一段丘に隣接して存在しており、相互に何らかの関係性があったことが推測される。本章では各時代における空間利用についてまとめていく。

### 1. 繩文時代

川除遺跡・下郡山遺跡からは繩文時代早期の土器が出土している。これらに続く前期の遺物は出土せず、中期～後期も小片が見られるだけである。続く後期後半～晩期においても両遺跡から遺物が出土するが、下郡山遺跡においてまとめた出土が見られる。

いずれにせよ繩文時代の遺物出土量は少なく、確かな遺構も確認されないことから、各時期を通じてキャンプサイト的な性格が窺える。

### 2. 弥生時代～古墳時代

下郡山遺跡において、1層を掘り下げる形で竪穴住居を構築している。この竪穴住居には時期差があることは前章において触れたとおりである。

この時期において川除遺跡においても土師器の出土は確認されるものの、明確な遺構を確認することはできなかった。この要因としては、現代における耕作活動により遺構が消失した可能性と、下郡山遺跡と異なり礫が多く、竪穴住居を構築するには向きであるため選地した可能性をあげておきたい。

また集落の帰属年代は弥生時代終末から古墳時代前期に収まる公算が高く、溝下古墳群の被葬者とは現時点では直接的な関わりは無いものと推測される。

### 3. 古代～中世

中世山城に関連すると推測される遺物が川除遺跡から出土している。この時期の遺物は下郡山遺跡において、ほとんど出土していない。これが当時の空間利用によるものなのか、現代の耕作活動により消失したものなのか、今後、同地区における発掘調査成果を踏まえ検討する必要があろう。遺物として特筆すべきは前掲第13図の青磁碗で4点を図示している。その他図示できなかったが、青磁碗の破片が出土している。時期は13世紀代の輸入品と技法等から国産品と推測されるものがある。遺構等は今回の調査範囲では検出しなかったが、近くに何らかの中世遺構が存在した可能性が強く、遺物もその存在を示唆していると考えられる。

## 参考文献

本報告書を作成するにあたり、以下の文献を参考にした

- 池畠耕一 1980「成川式土器の編年細分」『鹿児島考古』第14号 鹿児島県考古学会  
石橋新次 1983「中九州における古式土師器」『古文化談叢』第12集 九州古文化研究会  
今塙屋毅行・松永行寿 2002「日向における古墳時代中期～後期の土師器—宮崎平野部を中心として—」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 九州前方後円墳研究会  
岩崎新輔 1998『下郡山・新村B遺跡・莊貝塚・』出水市教育委員会  
岩崎新輔 2007『大久保遺跡・大久保B遺跡』出水市教育委員会  
岩崎新輔 2007『野田畠遺跡』出水市教育委員会  
乙益重隆 1996『中九州地方』『弥生式土器集成本編I』  
乙益重隆 1973『成川遺跡』埋蔵文化財調査報告第七 文化庁  
重留康宏 2006『縄文時代の高坏』『大河』第8号 大河同人  
中村 浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房  
中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第26号 鹿児島大学法文学部考古学研究室  
1993『中津野式土器に表れる地域色』『鹿児島考古』第27号 鹿児島考古学会  
2000『鹿児島県出土の高坏の分類』『大河』大河同人  
野田拓治 1982「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古希記念文化論集』  
柳田康雄 1982「3・4世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古希記念文化論集』  
吉本正典 1995「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察—須恵器出現以前の資料を中心として—」『宮崎考古』第14号 宮崎考古学会  
松ヶ野さゆり・松木千草・新東晃一 2005『下終迫II遺跡・道下段遺跡』高尾野町教育委員会  
松本茂・重留康宏 2008『野首第2遺跡(第2分冊)』宮崎県埋蔵文化財センター  
『出水郷土史』 2004 出水郷土誌編集委員会

## 謝 辞

当遺跡の発掘調査・報告書作成において以下の機関・方々にご教示・ご助力をいただくことができた。  
末尾ではあるが御名前を記して感謝の意を表する  
新東晃一 前迫亮一 中村和美 堂込秀人 富田逸郎 八木澤一郎 成尾英仁 長野真一 東 和幸  
株式会社大林組出水酒造工事事務所(順不同、敬称略)

# 図 版





川除遺跡礫集積検出状況（西から）



川除遺跡礫集積検出状況（西から）



下郡山遺跡 SH3 完掘状況（南西から）



下郡山遺跡 SH3 調査状況（南西から）



下郡山遺跡 SH3 土器出土状況（1）（東から）



下郡山遺跡 SH3 土器出土状況（2）（南から）



下部山遺跡 SH. 4 石圍炉検出状況（北西から）



下部山遺跡 SH. 4 石围炉（南東から）



SI 4 檢出狀況



SI 5 檢出狀況



SI 6 檢出狀況



SI 7 檢出狀況



SI 8 檢出狀況



SI 9 檢出狀況



長頸壺出土狀況



SI 14 檢出狀況



SI 11 検出状況



SI 12 検出状況



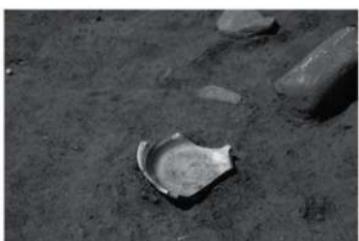
SI 17 検出状況



段丘礫



段丘礫

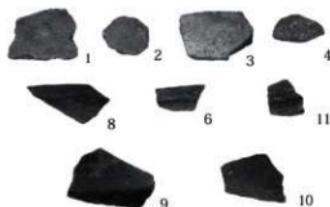


須恵器出土状況



発掘調査状況

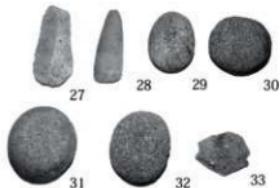
图版 7



川除遺跡包含層出土遺物（糙文土器）



川除遺跡包含層出土石器



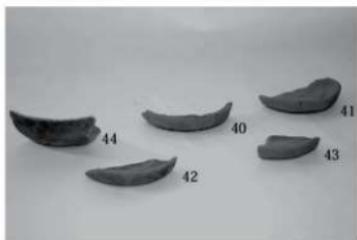
川除遺跡包含層出土遺物（砾石器）



川除遺跡包含層出土遺物（弥生土器・土師器）



川除遺跡包含層出土遺物（弥生土器）



川除遺跡包含層出土遺物（皿・環）



川除遺跡包含層出土遺物（管狀土錘・土製品）



川除遺跡包含層出土遺物（石錘）



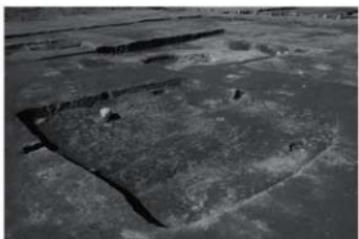
SH 1 検出状況（南西から）



SH 1 完掘状況（北から）



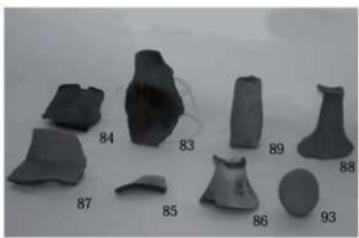
SH 2 調査状況（西から）



SH 2 完掘状況（北東から）



SH 2 出土遺物（1）



SH 2 出土遺物（2）



SH 1・SH 3 完掘状況（北東から）



SH 3 検出状況（北西から）



SH 3 調査状況（北西から）



SH 3 土器出土状況（東から）



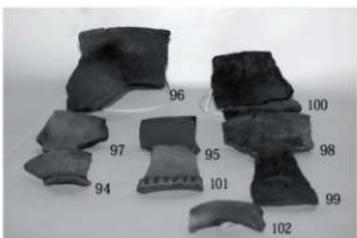
SH 3 土器出土状況（南から）



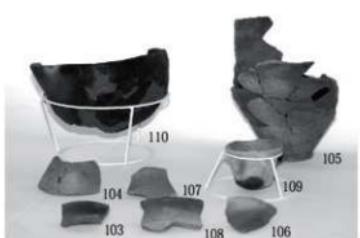
SH 3 地床炉・土器出土状況（南東から）



SH 3 地床炉半裁状況（北から）



SH 3 出土遺物（1）



SH 3 出土遺物（2）



SH 4 検出状況（東から）



SH 4 調査状況 (1) (南西から)



SH 4 調査状況 (2) (北東から)



SH 4 石圓炉検出状況 (北西から)



SH 4 石圓炉遠景 (南東から)



SH 4 石圓炉近景 (南東から)



SH 4 石圓炉近景 (北から)



SH 4 石圓炉遺物出土状況 (南東から)

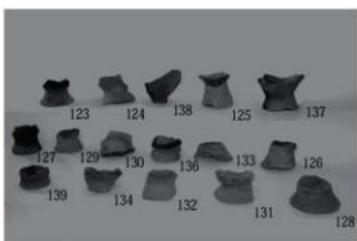


SH 4 石圓炉調査状況 (南西から)

図版 11



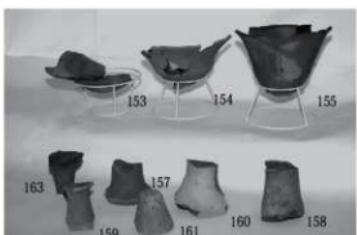
SH 4 出土遺物（甕）



SH 4 出土遺物（甕底部）



SH 4 出土遺物（甕）



SH 4 出土遺物（高环）



SH 4 出土遺物（甕・小型丸底甌）



SH 4 出土遺物（石器）



SH 6 検出状況（南から）



SH 6 完掘状況（北東から）



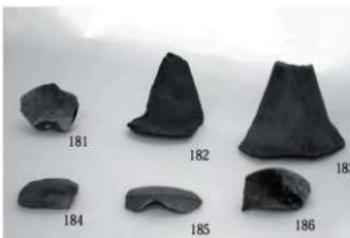
SH 6 調査状況（北東から）



SH 6 遺物出土状況（北東から）



SH 6 出土遺物（1）



SH 6 出土遺物（2）



SH 8 検出作業状況（南から）



SH 8 調査状況（北東から）



SH 8 完掘状況（北東から）



SH 8 出土遺物

图版 13



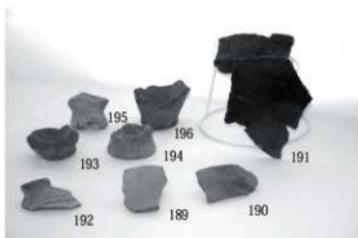
下部山道路包含层出土遗物（1）



下部山道路包含层出土遗物（2）



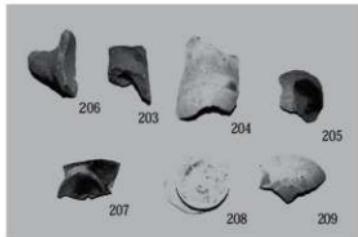
下部山道路包含层出土遗物（3）



下部山道路包含层出土遗物（4）



下部山道路包含层出土遗物（5）



下部山道路包含层出土遗物（6）



発掘体験実施状況（1）



発掘体験実施状況（2）



発掘体験実施状況（3）



現地説明会実施状況（1）



現地説明会実施状況（2）

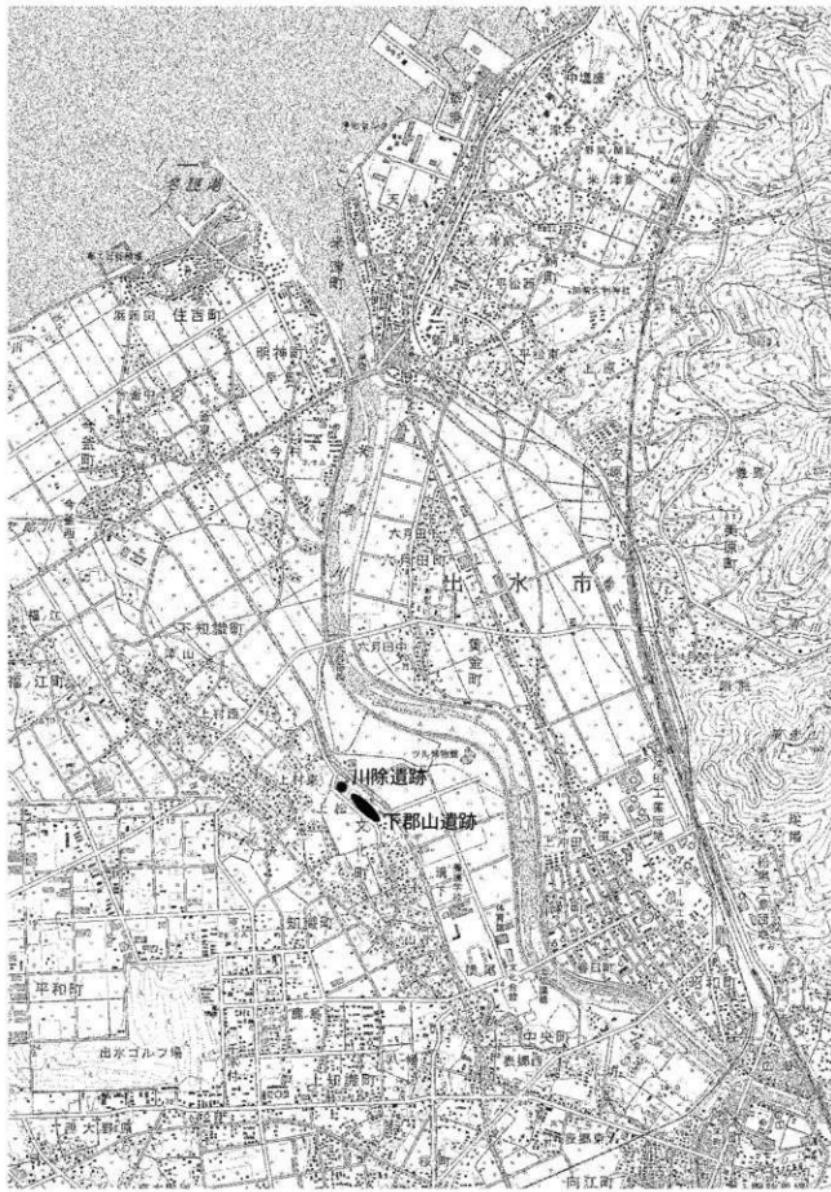


現地説明会実施状況（3）



## 報告書抄録

ふりがな	かわよけいせき・しもこおりやまいせき		
書名	川除遺跡・下郡山遺跡		
副書名	出水酒造株式会社出水工場建設に伴う川除遺跡・下郡山遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書		
卷次			
シリーズ名	出水市埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ番号	24		
編著者名	岩崎 新輔	重留 康宏・小泉信吾	
編集機関	出水市教育委員会	大福コンサルタント株式会社	
所在地	〒899-0201 出水市緑町1番3号	〒890-0068 鹿児島市東郡元町17番15号	
発行年月日	西暦 2013年3月		
ふりがな 所収遺跡名	かわよけいせき しもこおりやまいせき 川除遺跡・下郡山遺跡		
ふりがな 所在地	かごしまりんいざみしょんかちょう 鹿児島県出水市文化町 354 ~ 373、375 ~ 377		
コード	市町村	462080	遺跡番号 川除遺跡 8-69 下郡山遺跡 8-95
経度 (日本測地系)	川除遺跡 下郡山遺跡	北緯 130° 20' 19"　北緯 130° 05' 33"	東経 32° 05' 36"　東経 32° 05' 33"
調査期間	川除遺跡 下郡山遺跡	20120702 ~ 20120928 20120803 ~ 20120928	
調査面積	川除遺跡 下郡山遺跡	2,300 m <sup>2</sup> 2,000 m <sup>2</sup>	
調査原因	出水酒造株式会社 出水工場建設		
所収遺跡名	川除遺跡		下郡山遺跡
種別	散布地		散布地
主な時代	縄文時代・弥生～中世		縄文時代・弥生～古墳時代
主な遺構	礫集積		竪穴状遺構
主な遺物	縄文土器・土師皿・青磁・石器		縄文土器・土師器・石器
特記事項			
要約	縄文時代のキャンプサイト		弥生時代終末～古墳時代前期の集落



### 川除遺跡・下郡山遺跡位置図 (S=1/25,000)



遺跡遠景（南東から）



遺跡遠景（俯瞰）

出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（24）

## 川除遺跡・下郡山遺跡

発行日 2013年3月

発 行 出水市教育委員会

鹿児島県出水市緑町1番3号

編 集 大福コンサルタント株式会社

鹿児島県鹿児島市東郡元町17番15号

印 刷 澄上印刷株式会社

鹿児島県鹿児島市南栄3-1-6



